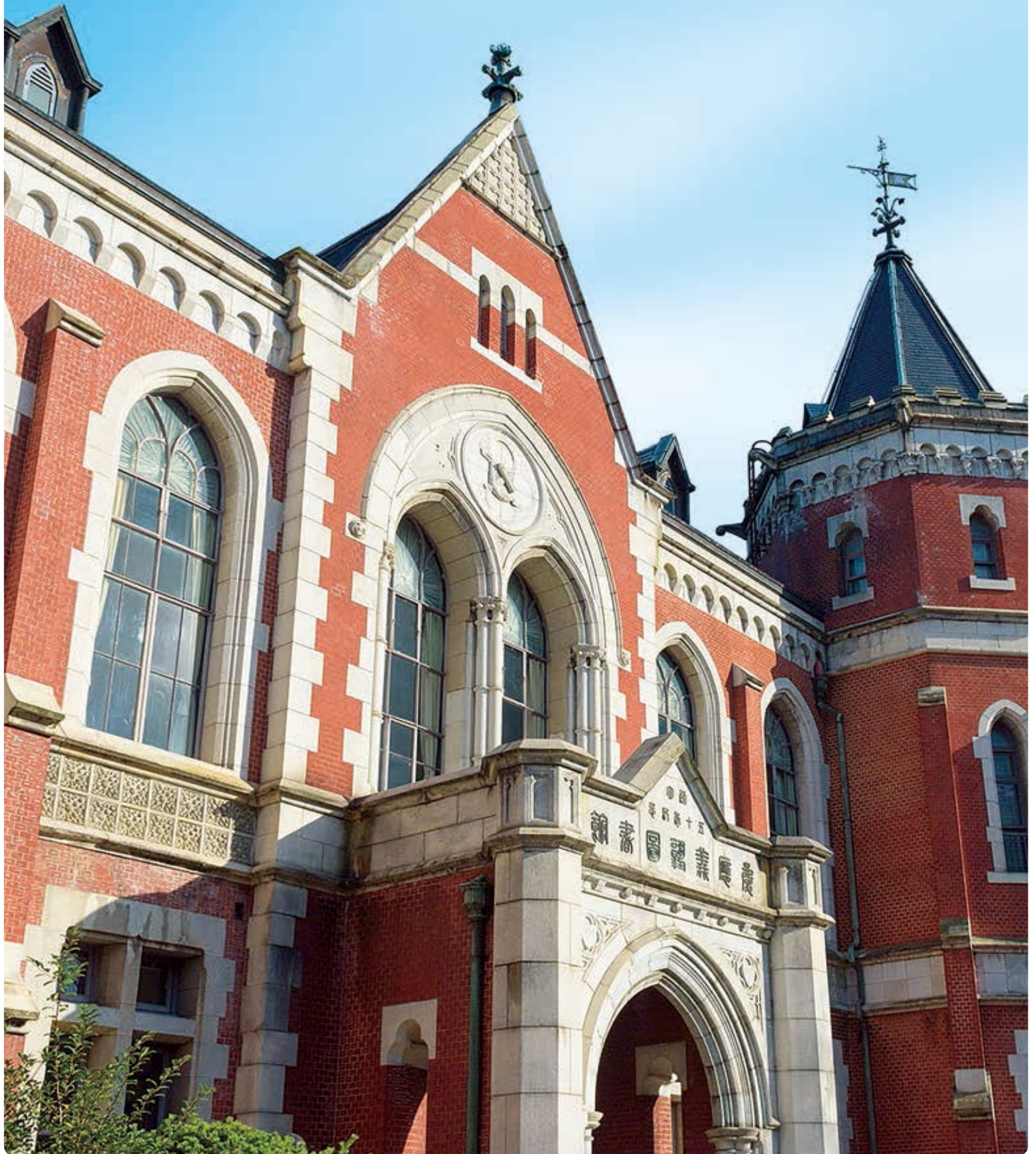




慶應義塾大学 文学部

Keio University Faculty of Letters





- 02 3 Key Features **慶應義塾大学文学部 3つの特徴**
- 04 Words of Welcome **人と人をつなぐ「文」** ことば 松浦良充
- 06 Special Talk **阿川佐和子さんスペシャルトーク**
- 10 Student Interview
現役学生へのインタビュー 文学部の「学び」とは？
- 14 My Research **研究紹介**
清水明子・川畑秀明・石田京子・安形麻理・上野大輔・荒畑靖宏・井上櫻子・近森高明
- 22 Alumni Voice **卒業生の声**
文学部で過ごした時間は私の財産
原点であり仕事に結びついた文学部の学び
- 24 Departments **専攻・部門ガイド**
哲学 / 倫理学 / 美学美術史学 / 日本史学 / 東洋史学 / 西洋史学 / 民族学考古学
国文学 / 中国文学 / 英米文学 / 独文学 / 仏文学 / 図書館・情報学
社会学 / 心理学 / 教育学 / 人間科学 / 自然科学 / 諸言語
- 43 Graduate Schools **大学院**
- 44 Research Institutes **研究所**
- 45 Correspondence Courses **通信教育課程**
- 46 Study Abroad **留学のすゝめ**
- 48 Scholarship **奨学金**
- 50 Event **講義入門2020**
- 51 Extension Program **公開講座**
- 52 Alumni **各界で活躍するOB&OG**
- 53 Data **入試データ&進路**
- 54 FAQ **よくある質問**

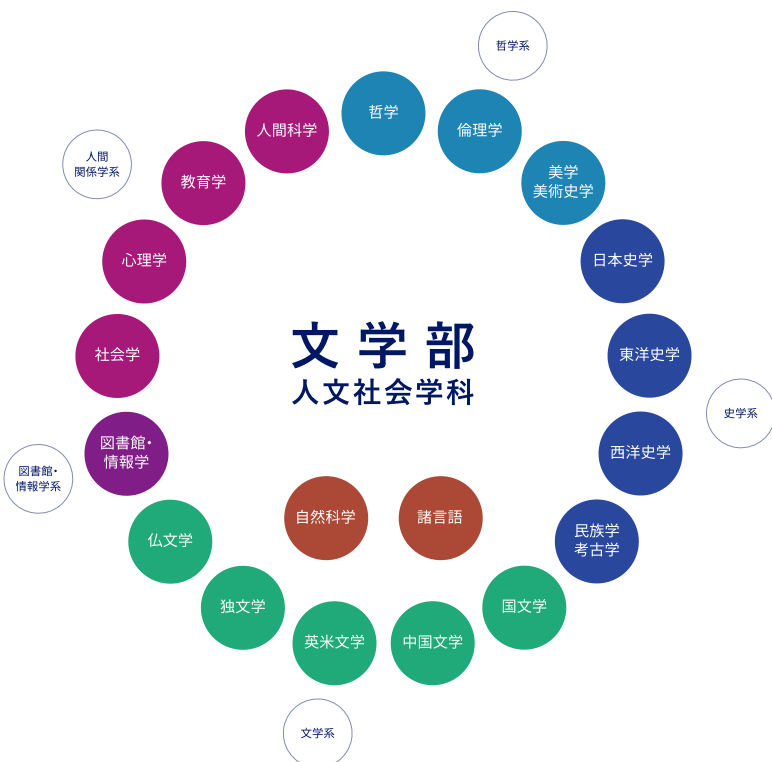
Keio University Faculty of Letters

3つの特徴

3 Key Features



17専攻 + 2部門という 幅広く横断的な専攻分野

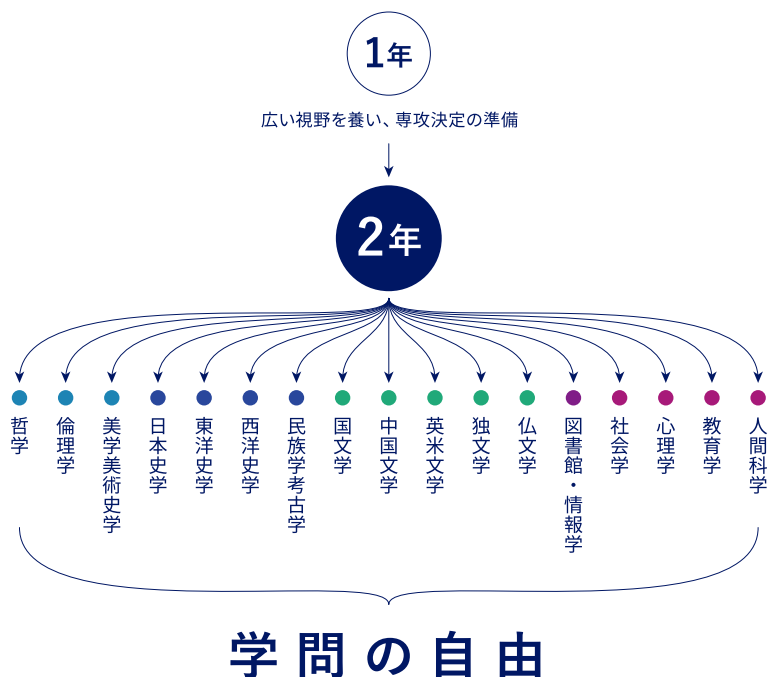


慶應義塾大学文学部は、「文」に関するすべての領域を対象にした研究教育機関です。そのカバーする研究領域は幅広く、従来の「文学」のイメージをはるかに超え、学問・芸術・科学を包含する「知」そのものです。各国語を駆使した文学系から、哲学系、史学系、図書館・情報学系、人間関係学系、さらに自然科学までも含まれます。

独立した多彩な専攻と、それらを横断して学べる学習システム。全ては、「言葉 = Letter」を媒介として知の集合体へと結実していきます。これこそが他に類をみない慶應義塾大学文学部の特徴と言えます。

2

専攻選択は2年次からという “学問の自由”



文学部へ入学した新入生は、1年次を日吉キャンパスで過ごし、総合的な視点を養います。そこでは、基礎的な科目と同時に「特論」「総合教育セミナー」と呼ばれる専攻への橋渡しを行う科目が存在します。専任教員がそれぞれの研究分野の授業を少人数で行います。こうした試みの中から2年次からの専攻を決めることができるというユニークなカリキュラムを実施しています。つまり1年次は単一学科の学生として入学し、1年かけて自分が進むべき専攻をじっくりと見極めることができるのです。

そこには学問を自分自身のものとして成長するための自由があります。

3

多彩な人材を輩出する 125有余年の歴史



<p>1890</p> <p>大学部発足と同時に文学・理財・法律の三科が置かれる</p>	<p>1920</p> <p>大学令にもとづく大学となり文学部・経済学部・法学部・医学部を設置</p>	<p>1951</p> <p>図書館学科を開設。 文学研究科(哲学、史学、国文学、英文学、仏文学の5専攻の修士課程)、社会学研究科(社会学)を開設</p>
<p>1979</p> <p>民族学考古学専攻を開設</p>	<p>1981</p> <p>人間科学専攻を開設</p>	<p>1990</p> <p>文学部開設100年</p>
<p>2000</p> <p>5学科を人文社会科学部に統合</p>	<p>2015</p> <p>文学部創設125年</p>	

文学部は1890年に大学部創設と同時にスタートしました。まさに私学最古の文学部といえる歴史を誇ります。森鷗外が開学当初に審美学を担当しているなど、文学だけでなくリベラル・アーツを網羅していました。その後も、永井荷風、西脇順三郎、遠藤周作、折口信夫、井筒俊彦など、数多くの独自の世界を築き上げた著名な詩人、文学者、民俗学者、哲学者が学生として、教員として文学部を作り上げてきました。

文学部の教育・研究には、創始者福澤諭吉の「半学半教」の精神を受け継ぎ、教員と学生がお互いに切磋琢磨し高め合う精神が今でも息づいています。文学部はこの125有余年の歴史の中から、学術・文化的側面だけでなく広く社会、経済分野に至るまで、数多くの優秀な卒業生を輩出してきました。

Words of Welcome

慶應義塾大学文学部を志望されるみなさんへ

人と人をつなぐ「文」^{ことば}

文学部の知的領野の拡がり

慶應義塾大学文学部は、「文」にかかわる広大な領域を対象にした研究教育機関です。

その「文」学とは、小説や詩などの文芸に限定されるのではなく、広く「学芸」(学問・芸術・科学)全般を包含する「知」を意味します。

もちろん人類の文化活動の象徴的な成果である文学や言語、そして芸術を学ぶことは、文学部にとって欠くことのできない要素です。しかし私たち文学部の知的探究の領野はそれにとどまりません。真・善・美にかかわる哲学的な叡智の追究、人類の歩みとこれからを展望する歴史的な探究、記録された知識や情報の保存と活用に関する理論と技術の構築、社会の構造や機能とそれを構成する人間の心、行動、形成などについての科学的検証、さらには文化創成の基盤をなす自然環境と人間との相互作用の解明など、人間と社会そして自然のすべての領域に、私たちの眼差しは向けられています。まさに人類がつくりあげてきた世界の文明、社会や環境、そして人間そのものをめぐるあらゆる分野にわたっているのです。

人文社会科学：5学系17専攻・2部門

慶應義塾大学文学部は、組織的には、5つの学系に17の専攻(哲学系：哲学、倫理学、美学美術史学/史学系：日本史学、東洋史学、西洋史学、民族学考古学/文学系：国文学、中国文学、英米文学、独文学、仏文学/図書館・情報学系：図書館・情報学/人間関係学系：社会学、心理学、教育学、人間科学)、さらに自然科学および諸言語の2部門から構成されています。また関連する大学院としては、文学研究科および社会学研究科があります。

文学部には140名を超える専任教員が所属しています。慶應義塾では、理工学部、医学部に次ぐ規模です。各教員は独創的な研究活動を活発に進め、国内外の専門的な各分野で注目を集める成果をあげています。

私たちの文学部は、人文社会科学の1学科制をとっています。学年定員800名の学生諸君は、専攻を特定することなく入学します。

1年次には自然に恵まれた瑞々しい日吉キャンパスにおいて、多彩な学問分野に挑戦します。それによって幅広くかつ豊かな教養を形成するとともに、「文」学部の知の基盤をなす語学の習得に努めます。学生諸君はこの1年間で、知的に、そして人間的に、さらには行動面でもそれぞれの世界を拡張してゆきます。

2年次以降は、落ち着きのある洗練された雰囲気をもつ三田キャンパスにおいて、17専攻のいずれかに所属し学びます。卒業後の進路も意識しつつ、専門的で深遠な知の領域に進んでゆきます。文学部が大切にしている教育の特色の一つに、少人数教育があります。ゼミ(研究会、演習)をはじめとして三田で開講される多くの授業科目は小規模で、教員と学生、さらに学生同士が親密な関係を保ちつつ、切磋琢磨しながら成長してゆくことができます。



文学部長 松浦良充



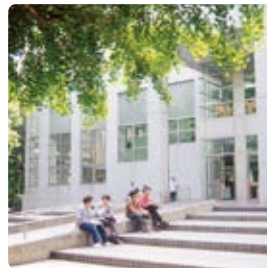
「人間交際」のなかの「文」

福澤諭吉は、societyという概念を「人間交際」という日本語で表現しました。そして、学問にとりくむことの趣旨について、個人で充足するためではなく、「人間交際の仲間に入り、その仲間たる身分をもって世のために勉むるところなかるべからず」(『学問のすすめ』)と説きました。

文学部の「文」は、ひとりぼっちで机に向かい、黙々と本を読むことによって達成されるものではありません。慶應義塾大学文学部は、「文」によって人と人をつなぐことをめざします。そして「文」はまた、人と人とのつながりのなかで生成されます。文学部の「文」は、人間交際を成立させる要です。と同時に、人間交際の躍動のなかで「文」が構成されるのです。私たちの「文」は、決してモノローグではあり得ず、人と人との交わりと、それが幾重にも重なり合う社会のなかで育まれ、その交わりや社会を紡ぐ媒体になります。

このように文学部の「文」は、「人間交際」すなわち社会のあり方と緊密な関係をもちます。文学部の研究教育が多様な領域に開かれているのは、こうした知の躍動が現代社会のなかで無限の拡がりをもって展開してゆくからです。そしてその根幹には、さまざまな人々や社会がいろいろなもの見方や考え方をもちことを尊重する、という意思や姿勢が貫かれています。「人間交際」は他者への理解と配慮によって成立するからです。文学部の知の多様性は、そうした思想を基盤としています。

さらに文学部の知は、単に多様性や広領域性を特徴とするだけではありません。私たちの知は、人間と文化、社会、環境を成り立たせている根源を志向します。つまり事象の本質を追究するという姿勢です。そしてそれにはやはり「文」が重要な役割を果たします。いわゆるグローバル化や情報社会の到来によって、変動が激しく流動化する社会や世界の動向があるからこそ、根源や本質を追究するという文学部の意義はますます重要になってきます。慶應義塾大学文学部の教員と学生は、ともに互いの「文」を尊重しながら、事柄の本質を見極めるための知的探究に共同してとりこんでいます。





Special Talk

Sawako Agawa

阿川佐和子さん

Profile

あがわ・さわこ / 東京生まれ。

東洋英和女学院中部・高等部を経て、慶應義塾大学文学部に入学。

同学部西洋史学科を卒業。

織物職人を目指しつつ、様々なアルバイトを経験。

1981年、TBSテレビ「朝のホットライン」でレポーターデビュー。

1989年「筑紫哲也 NEWS23」のキャスターに。

1998年以来、「ビートたけしのTVタックル」進行役として人気を博す。

エッセイ『聞く力』、小説『ウメ子』などで作家としても活躍。

2017年には女優としてテレビドラマ『陸王』でも好評を得た。

作家、エッセイスト、タレント、そして近年では女優としても才能を輝かせている阿川佐和子さんも、本塾文学部のご出身です。昭和を代表する作家の一人、阿川弘之氏の娘として育った佐和子さんは、どのようにして「慶應」と出会い、学生時代に何を得たのでしょうか？インタビューや対談の名手としても有名な阿川さんですが、今回はご自身の学生時代、また慶應義塾への思いについて語っていただきました。

サワコ、慶應に入る

私は大学だけが慶應で、中学・高校は女性ばかりの学校に行っていました。東洋英和女学院という、プロテスタントのミッションスクールですけど、割に自由な校風で、明るけりゃいいって感じでした。昭和28年生まれですから、高校卒業したのが、昭和47年くらいだと思います。その頃、女子で大学まで行った人間は、早稲田はもうちょっと多かったと思いますけど、慶應の場合には半分くらいしか就職しなかったと思うんですね。就職したとしても、腰掛みたいなことで、3、4年経ったらお嫁に行くということを期待することを念頭においているような雰囲気がありました。

自分と全く違う環境の “ something ” を楽しんで受け入れる心の広さを学んでほしい

父は要するに、さっさと自分の手伝いをするとか、家の手伝いをするとか、あるいは、徒弟奉公でもして、料理でもうまくなってもらうとか、そっちの方がいいんじゃないかっていう風に思っていたんでしょう。それでも私が「(大学)に行きたい」って言ったら、まあ要するに、何になるってこともないだろうけど、「大学に行ったら“something”を学ぶことがあるだろう」と父が言って。“something”って、大雑把な言葉ですけど、こいつは技能とか知識とか研究とかいうようなこととはかけ離れているだろうから、大学に行った人達や大学で教えている先生方とか、そういう雰囲気とか、そういうところで何か空気のようなものだけ、生涯の友達とか、人生にとって大事なこととか、そういうことを何となく身に着けてくるということになるだろうと、父は予測していたんでしょうね。それでようやく受験を許されて。

うちは全く慶應とは縁が無かったんですけど、私が大学に入る以前に、私の8歳年下の弟が、たまたま慶應幼稚

舎の父は、「だいたい学校なんて行かなくていい」という考え方でした。「学校をじゃんじゃん休め、お前はそれよりもためになるものが他にあるはずだ」と言う父に「子どもっていうのは、学校に行きたいの」って反発したら「学者にでもなるつもりか？」って言われて、いや、「学者にはなれないと思う」と…。兄(阿川尚之氏・本塾総合政策学部名誉教授)は優秀でしたけど、私は馬鹿でしたから、そういう気概は無いし、テニスクラブに入りたいと言うと、「デ杯の選手になるのか」って言う。「いや、そこまではいかないけど」「だったらやめろ!」みたいな感じに言われちゃうので、それに反発して、何とか自分の場所を見つけるために、学校に行っていたってようなところがあって。

舎に入学したんです。そこから慶應との関係が出来上がりました。幼稚舎で大変立派な、桑原先生という、父も尊敬するような先生が弟の担任になって下さったので、父は急に、「慶應というのはすばらしい学校だ」と言い出して。桑原先生に教えていただいた割に、弟は出来が良かったのですが。

そこで、4人兄弟の中で、慶應に一匹入って。その次に兄(尚之氏)が、実は私より2歳上なんですけど、中学の時に大病を患って入院していた関係で、学校に復学した時に、私より1年学年が下になっていたんです。前提として、兄は優秀です。幼稚舎入った弟は優秀じゃないけど、たまたま運が良かった。妹は馬鹿です。そんな兄が、普通部にいた小学校の時の友達から「進学校みたいなところにいると体が持たないだろう、お前慶應に来たら?」って。それで、高校受けたら入っちゃった。慶應高校に入って、交換留学生としてハワイのプナホウっていう学校に行ったら、兄ってね、優秀なんだけどかぶれ易いタチでね。

もう、すぐ、すっかり「慶應大好き、ハワイ大好き!」ってなって、「慶應の仲間が人生の宝!」みたいなことになってたんですよ。それで、兄の慶應の連中が家に遊びに来たりして、「Hi! Now!」とかいって。

私は、「慶應って、何だこの連中は?」って、横目で見ながら、うらやましいって気持ちもあったんですね。何だか人生、青春謳歌してるなこいつらって。兄は学年が下がったから、年上だけど同級で、私は本当に彼らと同級ってことで、「佐和子、そんなひがんでないで、こっち来いよ」、「ふん、慶應が何だ!」とか言ってたんですよ。その割には、大学行こうとしたら、やっぱり慶應かな、なんて思って、悔しいながらも慶應受けたという経緯があったので。





学生運動、学科選択、就職活動…

その頃、遠藤周作さん(作家・本塾文学部仏文科卒)が、よく家にいらしてたんですけど、あれだけ「慶應なんて、別に」なんて言ってた父が、遠藤さんに「子ども三人も慶應に入れて、お前んとこも、ようやくハイ・ソサイエターの仲間入りやなあ!」と言われてました。私も、「佐和子ちゃん、慶應で何をしとる!」「えーと、テニスの同好会に入りまして…」「not only tennis, but also studyやなあ」とか、よくわからない英語言われて。そしたら父が、「こいつは何もしとらん! テニスしかしとらん!」とか何とか言って。

受験を達成したら目標がなくなった

私は大学1年、日吉に行ったんですが、2年で三田に行くはずが、行けないんですよ。授業ボイコットされて。結局、ぐずぐずぐずぐずした日々を過ごした結果、2年生は半年しかしてない。ようやく行けたのは夏になってからかな。文学部の場合は、ようやく2年生になって学科を選ぶことになるのですが、何だか中途半端な気持ちですよ。もちろん私の友達には、「私は美学を勉強したいの」とか「国文学を」「史学を」という子はいましたけど。「美学、かっこいいな」「哲学、難しそう」とかね。こうやって消去法でいくと、「西洋史?」それで西洋史いったみたいなものですから。すみませんね、がっかりするような話で。

三田で近代ヨーロッパ史とか色々なことをやっていったんだけど。ドイツ史の先生が素敵な声の先生で、私は洋画が好きだったんですけど、スティーブ・マックイーンの声優のひとと、その先生の声がすごく似ていて、「素敵!」と思って、顔を見ずに、先生の声がずっと聞いて、ものすごく熱心にノートを取ったのは、その授業だけでした。スティーブ・マックイーンに教えてもらってる、みたいな気持ちで。だから、このノートは人に貸しましたね。あとはダメでしたけど。

3年生がそういうことで、4年生だったって、もう3年生くらいから就職活動、皆始めてましたし。その頃、第二次オイル

私自身も、受験を達成してしまったら目標がなくなっちゃって、何を勉強したいのか、何になりたいのか。別に慶應じゃなくてもいいんですが、誰かいい人を見つけて、「父のような性格じゃない人を見つけて、お嫁に行く」というのが私の目標でしたから、穏やかそうな素敵な人はいないかしらって思っていたので、自分が何を勉強するかなんてことは、わかんなかったんです。

私達が大学1年に入った頃から、慶應でも学生運動が本格的になっていって。最初は工学部の学費値上げ反対だったような気がしますけど、だんだん波が大きくなっていって、バリケード張って授業ボイコットだとか。椅子なんかも、教室の前に、こう、がーって積み上げられていたので、大学行っても授業が無いんですよ。

父はその頃、学生運動にたいへん反対の思想でした。学生運動に盛んに参加していたのは、団塊の世代の人が多くですけどね、私達よりちょっと上の、4、5、6年くらい上の世代の人が多く。ノンポリあるいは思想はないけど一応流行だから、学生運動に参加している人達も多かったと思います。そういう人達が、私にとって一番、お嫁に行くには、対象として良い年頃、これ全部学生運動しているってことで、父に絶対許されないだろう、これが嫁に行きそびれた1つの要因でもございます(笑)

ショックに巻き込まれてた。考えてみれば、ひどい時代だったね。本当に働きたい人達は皆、会社訪問なんかを始めたけれど、男子で優秀な人も、第一希望なんてのはなかなか入れなくて、「優秀な〇〇くんも、入れないの?!」みたいな感じになっている空気が蔓延している時に、「私どうせお嫁に行くけど、一応就職してみようかな」なんて、そういうふざけたこと言ったら怒られそうな気もするし。私自身、当時はサラリーマンがほとんどいない家庭環境でしたから、会社って何するかよくわからない。要するに小間使いみたいなことだけをやるために就職するくらいなら、どうせ嫁に行くんだし、会社に失礼であろう、と。

そういうような話はこのキャンパスで友達と、「人生どうする?」とか「お嫁に行くたってさ」「やりがいてものは…」とか口だけは達者に色々話してたけど、何の裏づけもないような人生の悩みを語り合っていました。「あの人はだっ、卒業したら、あのお金持ちのステディと結婚するんでしょ」って人達も何人もいたし。「どうして? 私は恵まれないの?」とかいうような話ばかりして。時々失恋したり、失恋した子の悩みを聞いたり。田町駅前の喫茶店入ったりしてましたね。そんなことばかりやってましたね。なんだったんだろうね。

慶應の本当の良さとは…

それで、就職活動するのもやめて、何だろうと思った時に。小さい頃から、私は手先のことが好きで、編み物とか。近所に織物をやっている奥様がいらして、「そうだ。これが私の幸せだわ」と思って。毛糸を作って、紡いで、編み物をしたり、織物で作品を作ったりするってことを、自分の結婚した後も、自分の世界として保つような、ものづくりというところをやろうと思って、そうだ!と。そして父が言いましたね。「何のために慶應に入れたんだろうね」って。そりゃそうですよね。ま、総じて言えば、本当に失礼しました、慶應大学(笑)本当にすみません。

私はその後、慶應の幼稚舎でもアルバイトをしたんです。図書室で、小学生相手に編み物教えたりしてたんで、変な話が、全く先生でも何でもないので、その時教えていた子ども達が、今もう40、50歳くらいになっているんですよ。そうすると、何か綺麗な方がニコニコ近寄ってくるなって思ったら「さわ姉〜!」と。誰だかって思うと、その時に2年生だった何とかちゃんとかいう人が多くて。だから、それは先生でもないのに、何だか嬉しい気持ちになりますね。皆立派になったんだとか、色々苦労してるんだとか。

団結力というか結束力の固い学校だと思いますよね。そういう教え子たちと話したら、週に2、3回会ってるとかいうから、「あんた達、会いすぎだろ」って言ったんだけど。「もうちょっと外を見なさい、外を」って言いたくなるんだけど。慶應で育った人達って、自分のダメな部分も、良い所も、辛い時も全部一緒に過ごした、仲の良い兄弟みたいに、死ぬまで一緒にいるって人も多いから。

それはそれで素晴らしいことなんだけど、そうじゃない種類の人達とも、その世界も、見ることはやっぱり敢えてしないと、慶應だけの中にいると、安穩としちゃうんだけどなって、私は思いますね。自分の履歴とか、肩書きというものを全部取っ払った時に、自分が魅力的な人間であるかどうかということ、試さなければいけない時期が来ると思うんです。その名刺が無くなった時に、自分に何が残るかっていうのが。



履歴とか肩書を全部取っ払った時に自分に何が残るか

無くたって関係なく魅力的っていう人に、人は付いてきますからね。この高齢化社会、60歳で会社辞めて、「あと40年どう生きるの?」ってということになりかけるから。

育ちや生まれがどうであっても、自分と全く違う環境の人達と接したときに、「これは違う」って言って、拒否するんじゃなくて、「面白いぞ」とか「意外な共通点があるぞ」とか、「知らないことを教えてもらったぞ」「その人、すごいな」という風に思う心の広さを、大学というところで学ぶことが大事じゃないかと思っています。今の若い人達は、戦争後に生まれた世代の子どもの、あるいは孫の世代になりつつありますから。やっぱり日本っていう国は、敗戦以降、二度とああいう辛い思いを子どもたちにさせてはならぬ、と高度成長時代の大人たちは頑張ったんだと思うんです。それによって歪みや何かもありましたけど、その親たち、大人たちに守られていた世代は、「痛い思い」をするチャンスが無くなったっていうのかな。そうすると、それで不景気になったりすると、今のまを守りたいという保守的な気持ちが身につくのかな。

戦争直後の人達は、白いご飯さえあれば大丈夫って思っていた人達とか、病気になっても、あの頃に比べりゃ楽よ、と思う心が、どこかあったと思うんです。慶應の大事なところも、ユーモアの気持ちを持っていれば、生き延びられるような気がしますけれどもね。なんて、勉強しなかった私は、この程度ですかね、話せるのは。

Student Interview



現役学生へのインタビュー

文学部の「学び」とは？

文学部国文学専攻に所属する現役の学生三人(2017年入学)に文学部の魅力について語っていただきました。

幅広い知識や視点が身につくシステム

— 皆さんが慶應の文学部に入学した理由は何ですか？

佐合:もともとは、別の大学の附属高校に通っていたので、そちらの文学部に入るつもりだったのですが、そこは「読むこと」よりも、「書くこと」を中心に学んでいく方針だったため、色々な作品を読みたい自分とは合わないと感じました。そこで、別の大学の文学部をいろいろと調べた結果、慶應の文学部に行き着きました。

柴田:初めはイスラーム史について学びたいと思っていたため、(イスラーム研究で有名な)井筒俊彦先生が昔いらっしやった慶應義塾大学しかない!と考えていました。また、もともと文学が好きなので、慶應に限らず、入るのなら絶対文学部と決めていました。他の文系の学部は最初から視野に入れていませんでした。

木越:受験生の頃から文学部に入りたいと思い勉強していました。大学についてはこだわっておらず、自分は大学を選べる側に存在しないという認識があったため、どこか合格することができた大学に入ろうと考えていました。結果として慶應義塾大学文学部に合格することができたため、入学しました。

— 文学部で一番印象に残っている学習体験は何ですか？

佐合：2年生のときに学んだ国文学史という授業が、一番印象に残っている学習体験でした。今まで国文学といえば、作品を読んで分析、考察することが全てだと思っていましたが、文学の歴史を辿っていくという視点の学び方があることに、大変驚くとともに、こんな研究もあるんだ！と新鮮に思いました。

木越：(エジプトの象形文字の)ヒエログリフの授業です。これまでの言語の学習は、英語や中国語などの横に広がる言語と、古文などの縦に広がる言語を対象とするものでした。ヒエログリフはいわばナナメに位置する言語であり、非常に興味を持ちながら勉強することができました。ヒエログリフを読むと、当時大事にされてきた価値観に触れることができ、価値の相対性を再認識しました。

— 2年から専攻を選ぶ文学部のシステムをどのように思いますか？

柴田：大学に入ってから一年間の猶予があるということは、やりたいことが見つからない人、あるいはやりたいことが多すぎて決められない人にとって、とてもありがたいことなのかなと思います。私は当初は別の事に興味があったのですが、入学後に悩んだ末国文学専攻に進むことを決めたので、「本当にこれが自分のやりたいことなのだ」という気持ちがいよいよ明確になりました。

木越：一年から専攻が決まっていると、たぶん僕なら、国文学の授業のみを履修してしまい、他の分野に触れる機会が非常に少なくなってしまっていたと思います。専攻が決まっていなかったから色々勉強できたのかなと。一年生の間に得た知識は二年生以後非常に有用なものになると思います。

文学部の「学び」から得たもの

— 大学に入ってから自分が成長したと思うところがありますか？

佐合：どんなに細かいことでも疑問を持って一から調べようとする力が身に付いたと思います。特に古典文学を読んでいると、現代でも使われているのに意味が異なる言葉も多く出てくるので、「あの意味だろうな」と分かった気にならず、事細かに調べることが重要だということに気づけたことが、成長した点です。

柴田：学問における食わず嫌いをしなくなったということが一番の変化として挙げられます。例えば、中学生の頃は、教科書に掲載されたジャン・ジャック・ルソーの著作の一節を読んで「何この人、嫌い！」などと言っていたのですが、きちんと彼の著作を読んで形式的な女性性賛美をまとった差別意識が嫌いなのだと思えるようになり、一方的で感情的な「アンチ」にならずに、論理的な「批判」に昇華することが出来るようになりました。

木越：文学を学んでいく中で、人を簡単に否定せず、その人の背景に存在する事象を考えるようになれたことです。文章を読む際に、その主張や感情に対して反発する思いを抱いたとしても、そこに存在する情報をくみ取り、問題点はどこかを分析するようになれたことが、大学に入ってから自分が成長した点であると思います。

日本文学・日本語学を学ぶ国文学専攻の魅力

— 皆さんが国文学専攻に進学した理由は何ですか？

佐合：端的に言うと、『落窪物語』が読みたかったからです。高校の古典の授業で読んだ『落窪物語』が、今まで読んだ古典文学の中で一番面白く、「なんでこんなに面白いのだろう？」と思ったのがきっかけだったと思います。

柴田：私はぎりぎりまで東洋史に進むか国文学に進むか、どちらに対しても熱意があったため悩んでいました。しかし、既存の説から発想の転換をして自分なりの説をたてたい、と新しいことを「知る」ことの向こう側に挑戦したいという感情を文学に対して抱いたので、この専攻に決めました。1年次に受けた(国文学専攻の)小平麻衣子先生の国語国文の授業で、蛇を題材にした小説を扱ったとき、初読時は「よく分からない」という感想を持ちましたが、この小説上では蛇はこんなことを表象しているのかということが回を追うごとに分かりかけてきて、まさに目からうろこでした。国文学専攻を考えるきっかけになった授業です。

※国語国文=文学部が日吉キャンパスに設置する科目。

木越：もともと中学高校の国語科の教員を志していたからです。日本文学や日本語学の面白さ、楽しさを伝えられる教員になりたいと考えていました。

Student Interview

— 国文学専攻の最大の学びの特色は何だと思いますか？

柴田：古典、近代文学、日本語学、漢文など幅広い分野をカリキュラム上学ぶ必要があることです。最初はあまり関心がなくても、授業を聞いているうちに興味が湧く可能性は大いにあり得るので、各個人が特定の分野のみ偏重して学ぶ、ということがないというのがとても良い特色だと思います。

木越：先生方が楽しそうに授業をしていることです。(国文学専攻の)小川剛生先生は「馬を水辺まで連れていくことはできても、水を飲ませることはできない」という海外のことわざをよく引き合いに出されますが、先生たちは非常に美味しそうに水を飲んでいらっしゃいます。それを見ていると学生たちも水を飲みたくなり、国文学を学ぶ意欲がわくと思います。

— 国文学専攻で行われる万葉旅行の印象はどのようなですか？

※万葉旅行=80年近く続く国文学専攻の伝統的な行事。
国文学専攻の教員と2年生が二泊三日で奈良の史跡をめぐる旅行。

佐合：とても楽しいです！ここで一気に仲良くなった友達もたくさんいるので、ぜひ行くべきです。実際にその土地を生で見て、自分の足で立って、先生方の解説を聞けるのはとても貴重な機会だと思います。また、友達だけでなく、先生たちとも、かなり近い距離感で交流できて仲良くなれますし、何よりも名前と顔を覚えてもらえます。

柴田：先生方の意外な一面などが見られて、純粋にとっても楽しかったです。堅苦しいことは一切なく、日本文化と国文学に触れながら、楽しくお散歩というイメージがとても近いです。ぜひ参加した方がいいと思います。ただ、三月の奈良は寒かったので、マフラーなど防寒具をしっかり準備していくことをお勧めします。東京と同じ感覚でいたら、とてもとても寒かったです。

文学部の「学び」を将来に生かす

— 今現在、将来の進路についてどのように考えていますか？

佐合：銀行かメーカーに就職したいと考えています。銀行は接客の面で、メーカーはものづくりという面で、顧客のニーズを見つけ出してサービスを届けるという共通点があります。人の人生を一冊の本に例えることはよくありますが、顧客という一冊の本を読み解いて、その根底にある望みや思い、つまりニーズを汲み取るという力が必要になる職業においては、文学部国文学専攻で学んできたことが活かせるのではないかと思います。

柴田：大学院への進学を希望しています。ただ、いろいろなものを実際に見て、体験してから決めたいという気持ちが強かったため、三年生の夏にはインターンシップに参加するなど、就職活動に励みました。就職活動を通して、まだ学び足りない、学問を通してやりたいことがあるという気持ちがより自分の中で明確になったので、将来を決める上で必要な経験であったと強く感じます。

木越：柴田さんと同じように、大学院に進学し、その後は日本語学の研究者、または中学高校の教員になりたいです。どのような進路に進むにしても、文学や語学を学ぶことの楽しさ、奥深さを伝えられる人間でありたいと思っています。



国文学専攻の石川透教授から絵巻の解説を受ける。



国文学専攻

佐合 真佳 Sago Manaka

法政大学女子高等学校（現法政大学国際高等学校）出身



国文学専攻

木越 拡 Kigoshi Hiromu

東京都市大学等々力高等学校 出身



国文学専攻

柴田 夏帆 Shibata Kaho

静岡県立三島北高等学校 出身



『羅生門絵巻』(左)と『和漢朗詠集』(右)。国文学専攻にはこのような古典籍を扱って学ぶ授業もある。



My Research

ドイツ現代史と ユーゴスラヴィア

文学部・西洋史学専攻 [教授]

清水 明子 Akiko Shimizu

専門領域：ドイツ現代史・ユーゴスラヴィア史

研究内容：ナチズムがヨーロッパ周縁の多民族社会にもたらした支配体制の実態と地域の権力関係、社会変容を明らかにする研究を進めています。ドイツとバルカンにおける国民統合、「民族共同体」構築やネーション形成プロセスの解明につなげ、「国民国家」をめぐる議論にも向き合います。

私が研究分野としているのは、ドイツ現代史とユーゴスラヴィア史です。とりわけ、第一次世界大戦以降の中央ヨーロッパとバルカンにおいて、各国の国民がどのように作られていったのか、逆に、国民として認められえない住民はどのように排除されていったのかということについて研究を進めています。よき隣人として人生の大半を共に過ごしてきた住民、血を分けた同じ家族のメンバーが共生することを許されないような民族主義、人種主義のメカニズムは歴史的にどのように生起するのでしょうか。その点に関して、ヨーロッパ周縁の多民族社会において人と人との関係が劇的に変化する重要な画期となった、ヒトラーのドイツによるユーゴスラヴィア解体、セルビア占領、ボスニアを含む「クロアチア独立国」の創設について、セルビア語やクロアチア語、ドイツ語で書かれたオリジナル史料を発掘して分析しています。

実は、「民族」や「人種」はどの社会においてもア priori に存在するものではありません。多民族社会と見なされていたユーゴスラヴィアでは、同じ人でもアイデンティティが重層的で、自分がどの「民族」に帰属すると考えるのかは、時に宗教的な理由で決まり、場合によっては生き残るために選ばれることもあります。将来的願望が決定打になることもありました。さらに、それぞれの権力が自ら定める「民族」のカテゴリーも時とともに変わりました。

私自身、ユーゴスラヴィアとクロアチアにおいて日本国大使に随行して外交の最前線に身をおいた経験があります。NATOによるユーゴスラヴィア空爆における複雑で混沌とした外交プロセス、そして政権交代を現場で体験しました。ミロシェヴィチ大統領が逮捕された日には催涙ガスも浴びました。空爆に伴いドイツ大使館が閉鎖されると、日本がドイツの利益代表を引き受けた形となり、現代史がG8を中心とする国際社会によって面白いように作られていく仕組みを目の当たりにしました。

西洋史専攻では、単純化された「国民史」とらわれずに、歴史上の社会をなるべく総体として把握し、私たちの生きる現代

の世界を多面的かつ複合的に見る眼と姿勢を養うことを大切にしています。歴史的事実とされているものも国際社会を代表するような国の情報操作によるものかもしれません。それぞれの「概念」や歴史叙述の背景にさまざまな意図と歴史があることに留意すると、考古学や中世史までもが現在有力な国や立場に沿って書き換えられている現実気づくでしょう。

慶應義塾大学文学部の良い点は、積極的に歴史的史実に迫ろうとする熱心な学生が多いことです。学生は、自由な学風のなかで多角的に史料を読む語学力を身につけ、教科書や一般的な概説にとらわれない実証的な史実構築に取り組んでいます。



ユーゴを構成する全共和国・自治州4,500kmをつないだ諸民族のリレー(1956年第12回)



旧ユーゴスラヴィアの国会議事堂(左)と旧ドイツ占領本部(右)



My Research

感性心理学という 新しい分野への挑戦

文学部・心理学専攻 [教授]

川畑 秀明 Hideaki Kawabata

専門領域：感性科学、認知神経科学、実験心理学

研究内容：ヒトの感性における主観性と経験価値の心理とその脳メカニズムを研究しています。主に、芸術、美、魅力、ユーザー・エクスペリエンス、デザイン、ユーザビリティ、感性教育、鑑賞行動について関心があります。ヒトの主観はあいまいで非常に影響を受けやすいものです。その影響の関係や因果性に関する心と脳の働きを明らかにし、応用研究に活かします。

慶應義塾大学文学部の心理学専攻は、実験を通してヒト/人の心や行動を明らかにする「実験心理学」を重視しています。私の研究分野である感性心理学は、私たち人間が物事をどう感じるのか、その主観的な感じ方がどのように成り立つのかといった問題について、例えば、主観性や価値の体験、美しさ、魅力、愛情など、人間性の基盤となる心の働きに対して研究しています。心理学実験や機能的MRI、脳波、電流刺激法といった実験心理学の方法を基本としながらも、脳神経科学や工学、医学、美術史や哲学、博物館学等の様々な領域との融合を目指した、心理学の中でも新しい研究分野です。

美や愛は、文学や美学、哲学のテーマとして思い浮かべる人も多いでしょう。しかし、感性心理学では、従来の心理学の枠にとらわれることなく、人間の日常的な主観性について実験的な方法を用いてアプローチしています。私の研究室では、例えば、美術や音楽に対して感じる美しさがどのような条件によって成り立つのか、脳の働きとして捉えたり、美術館での行動として捉えたりしています。また、人の容貌に感じられる魅力の研究も行っています。私たちは他者の容貌からその人の内面や能力を推し量ろうとする傾向があります。容貌にあらわれる心や能力もありますが、思い込みである場合も多く、それが偏見や差別を生むこととなります。

実験心理学という自然科学的アプローチを主とする専攻が文学部の中に存在することは、慶應義塾大学文学部らしさの象徴でもあります。心理学専攻の教員のなかには、理工学部や医学部など様々な自然科学系の研究分野と連携して、盛んに共同研究が行われています。また、海外の大学や施設の研究者との国際共同研究も盛んです。このような国内外の研究者や異分野の研究者とのつながりは、慶應の独特の校風である風

通しの良さによるものだと思います。教育者として研究者として、様々な分野の研究者たちが自由闊達な議論を交わし、そこに学生も参加する機会も頻繁にあります。

現代社会では、データが重要になってきています。ビッグデータやディープラーニングが人文科学や社会科学にも学問にも新たな風を吹かせています。人間が作り出すデータ量は2030年には現在の千倍を超えると推定されます。保存されるべき情報の取捨選択が強いられる時代に、実験心理学という実証とデータに基づく学問の重要性は、今後ますます強くなっていくでしょう。



実験で使用する脳波計測用のキャップとケーブルたち。
雑然とぶら下げているようで、
使いやすいように整理されている



My Research

現代の倫理観を 原点から問い直す

文学部・倫理学専攻 [准教授]

石田 京子 Kyoko Ishida

専門領域：ドイツ倫理思想、法哲学

研究内容：イマヌエル・カントの実践哲学、主に法哲学に関心をもっています。これまで、カント哲学体系の内部での法と道徳とのつながりと、そのつながりがカントの法理解に与えた影響、そして、その法理解の現代的意義を研究してきました。それ以外では、ロールズやハーバーマス等、カントに影響を受けた現代政治哲学者たちの思想や応用倫理学にも関心をもっています。

倫理学は、人としての生き方や社会のあり方を問題としています。どう生きるべきかということは、個人の価値観にゆだねられているように思われがちですが、倫理学は、高度に理論化されている客観的な学問です。

私はもともと、応用倫理学という分野に興味を持っていました。これは倫理学の理論を現代社会にどう応用するかということを考える分野で、生命倫理や貧困、格差などの社会的な問題を倫理学の観点から解明しようとするものです。ただ私の場合、そういった問題に取り組む前に、考える際の基準となるような理論をまずは身につけなさいという指導教授の言葉がきっかけとなって、18世紀ドイツの哲学者イマヌエル・カントの法哲学・政治哲学を研究するようになりました。法は個々人がどう生きるべきかではなく、社会的な意思決定や制度の正当性に関わるものです。その違いを理解することは、現代の諸問題を検討する際にも非常に重要です。

カントは哲学の課題を、「人は何を知らるか」「人は何をすべきか」「人は何を希望してよいのか」という3つの問いで表しています。この3つの問いを考えることで、カントは最終的には「人間とは何か」という問いに答えようとしていました。再生医療やAIの出現、グローバリゼーションなど、さまざまな社会的要因によって私たちの人間観や社会観は揺らいでおり、その結果、私たちが人としてどのように生きるべきかを見通すことは困難になってきています。その意味で、「人間とは何か」を考えるのがかりをあたえてくれるカントの哲学や倫理学には、大きな意味があると考えています。理論的にも、カントの思想は現代哲学・倫理学の源流の一つとなっていて、今日「何をすべきか」を問ううえで避けては通れないと言うことができます。

倫理学専攻では、「古典的著作を通じた思想家との対話」を

特に重要視しています。それは、思想家たちの言葉を歴史的な事実としてただ暗記したり、ありがたがったりするのではなく、人間の生き方をどう捉え、どう考えるかについての「プロセス」や「方法論」を、思想家の言葉のなかから浮かび上がらせる、ということです。そういったプロセスや方法論の多くは、過去の遺物なのではなく、今でも広く使われています。人生や社会についての多様な考え方や価値観を体系的に学び、深く考えることができるのが、倫理学専攻のよいところだと思います。



イマヌエル・カント



My Research

西洋最古の印刷物とデジタルの融合

文学部・図書館・情報学専攻 [教授]

安形 麻理 Mari Agata

専門領域：図書館・情報学、書誌学

研究内容：西洋の初期の活版印刷術、特にグーテンベルク聖書を中心とするインキュナブラ、写本と刊本の関係、書物に対する考え方や読書の様式の変化などに関心があり、デジタル画像を用いたグーテンベルク聖書の研究を継続して行っています。また、資料保存、デジタルアーカイブ、貴重書のデジタル化、デジタル人文学、読書している人を描いた画像の分析にも興味を持っています。

図書館・情報学という専攻は、日本では限られた大学にしか存在しておらず、慶應義塾大学文学部の特徴の一つといえます。日本で最初に図書館学教育・研究を大学レベルでスタートさせた専攻です。その中で、私は書誌学という分野を専門に、デジタル技術を使って古い写本や印刷本の分析を行うという、現代ならではの手法で研究しています。

そのきっかけとなったのは、慶應義塾が西洋最初の印刷本であるグーテンベルク聖書(1455年頃)の購入を機に立ち上げた、貴重書をデジタル化して新しい研究分野を切り開こうというHUMI (HUmanities Media Interface) プロジェクトでした。

世界に残っているグーテンベルク聖書は48セット(上下2巻で1セット)です。印刷本という点すべてが同じだと思われませんが、実は、産業革命より前の時代の印刷本は、印刷中にも修正作業が行われるため、少しずつ違うのがふつうでした。15世紀半ばに印刷されたグーテンベルク聖書も違いがあるだろうと考えられていたものの、比較の手段がありませんでした。私は、画像データを使ってグーテンベルク聖書の全ページを正確かつ体系的に比較することで、その印刷技術や作業工程、人々がどのように印刷本の精度を高めていったかを明らかにすることができました。これはまさに、グーテンベルク聖書という西洋最古の印刷物と、現代の最先端技術であるデジタル技術の融合ということになります。

図書館・情報学専攻には、それだけでなく、本や新聞からインターネットやSNSに至る多様な情報メディアと人の関係、情報と社会の関係、情報の体系化と検索、情報を提供する社会的制度としての図書館の役割、など様々な研究分野があります。

研究を行ううえでは、コンピュータをはじめとする情報技術が欠かせません。統計的な分析を行ったり、他専攻や他学部の

教員の協力を得るなどして、これまでできなかった研究も可能になっています。その意味では、一般的な文学部というイメージとは少し違うかもしれません。

インターネットとコンピュータの普及で情報量が桁違いに増え、紙の本と並んで電子書籍も登場した現在、図書館・情報学専攻という分野が、これからの情報社会を考える一つの道筋を示してくれるでしょう。



デジタル技術を使って古い写本や印刷本の分析を行う



My Research

近世日本の人間と 社会を考える

文学部・日本史学専攻 [准教授]

上野 大輔 Daisuke Ueno

専門領域：日本近世史

研究内容：近世社会は、私たちの生きる近代社会の前提をなす、いわば伝統社会に当たると考えられます。私は仏教を切り口として、この時代の在り方を考えています。「宗教社会史」と銘打って、取り組んでいるところです。出発点は、地域で生活を営む民衆と、仏教の救済思想との関係を問うことでした。最近では、仏教教団と幕藩領主との関係、言い換えれば近世の政教関係を検討しています。また、神仏をめぐる秩序にも関心を持っています。

慶應義塾大学は、近代という時代の中での人間や社会の在り方を、広い視野から問い続けてきたように思います。特に文学部は、人間や社会に正面から向き合い、17専攻において多様な研究を展開しています。

その中であって日本史学専攻では、文献史料を主な手がかりとし、日本の歴史に即して研究が進められています。専攻スタッフは、古代・中世・近世・近代の各時代やキリシタン時代を専門とします。

私の専門は、日本近世史です。安土桃山時代から江戸時代までの、およそ300年間を扱っています。この時代は独自の身分制社会であり、私たちの生きる近代社会の前提をなす、いわば伝統社会に当たると考えられます。

私は、これまで必ずしも注目されてこなかった近世の仏教を切り口として、この時代の人間や社会の在り方を考えています。「宗教社会史」と銘打って、取り組んでいるところです。

出発点は、地域で生活を営む民衆(被支配身分の人々)と、仏教の救済思想との関係を問うことでした。最近では、仏教教団と幕藩領主との関係、言い換えれば近世の政教関係を検討しています。また、神仏をめぐる秩序にも関心を持っています。各地に残る史料を読み解くことで、新しい歴史像の構築を目指します。

高校までの歴史の学習では、沢山の人名・語句・年代などを暗記する必要に迫られます。ですが、大学での歴史の学習は違ってきます。これまでの成果に学びつつも、改めて根拠となる史料にさかのぼって検討します。そして、自分なりの新しい知見を獲得し、他者との議論を通じてよりよい歴史像を共有していきます。その過程で、自分もまた近代社会を生きる歴史的な存在であることが、再認識されることでしょう。

一つ一つの根拠を探って質の高い情報を読み取り、それをもとに人間や社会のあゆみを論理的に構築する能力は、社会人として生きていく上でも有効なはずで、こうした思いは、私を含め、専攻スタッフに共有されています。



『四箇寺用留記写』(寛政元年7月～同6年5月、上野所蔵)



『了専寺久唱寺問答御裁許写』(明和5年6月、上野所蔵)



My Research

「極端の、極端な思考」

文学部・哲学専攻 [教授]

荒畑 靖宏 Yasuhiro Arahata

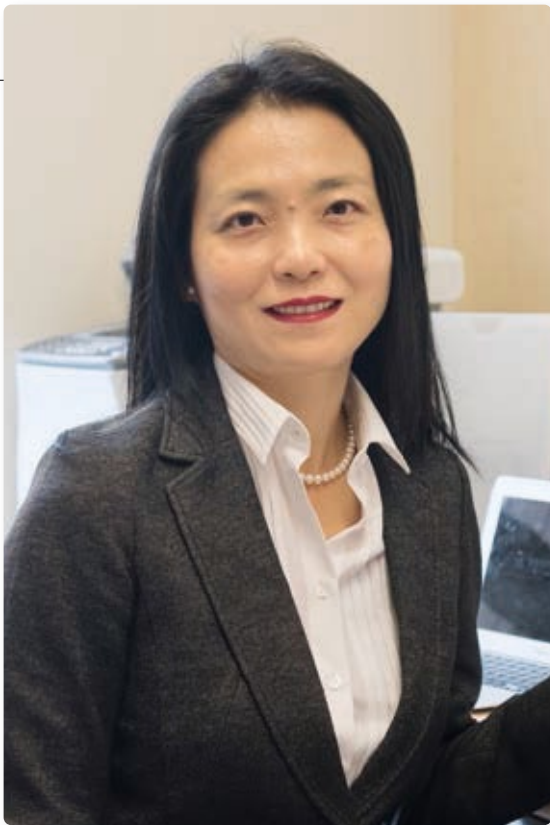
専門領域：言語と心の哲学、解釈学

研究内容：私の現在の研究の柱は、二つです。(1) G・フレーゲの論理哲学、前期ウイゲンシュタイン哲学、ハイデガーの解釈学的現象学を、いわゆる「形而上学的内部主義」と哲学的言語の可能性の問題をめぐって比較・架橋すること、(2) アリストテレス、カント(『判断力批判』)ハイデガー、ガダマー、ウイゲンシュタイン、ライル、アンスコム、マクダウェル、M・トンプソンらを、知識論・言語哲学・行為論における「フロネーシスの伝統」とも呼ぶべき哲学的系譜として描きだすこと。

わたしの現在の専門は哲学ですが、もともとは同じ慶應義塾大学の法学部政治学科の出身です。大学院(文学研究科)から本学の哲学専攻に進んで今にいたります。専門領域を哲学へと変更した理由は、その極端さに惹かれたためです。哲学は、何につけても極端です。たとえば、学問を志す以上は、誰でもあれ懷疑的であることを求められるものです。世間の通説に対してであれ、学界の従来の共通見解に対してであれ、はては自分自身のこれまでの研究キャリアに対してであれ。ところが、ひとたび哲学者が懷疑を発動しようものなら、それはすべてを疑い尽くすまでとどまることがありません。神の存在はもとより、世界の存在、はては自分自身(わたしがわたし自身だと思っている統一的人格としてのこの人)さえも、哲学的懷疑の対象になります。なぜでしょうか。それは、哲学者が純粋に知りたいからです。ひとは普通、ある特定の目的・関心・動機があって、ある特定の情報を得ようとします。学者の場合も基本的には同じです。通常の学問というのは、「学問分野」や「学科」と訳される“discipline”という言葉が示しているように、目的や方法に規制された体系的な知識のことを指します。ところが哲学者は、すべてが本当のところどうなっているのが純粋に知りたいのです。それが、哲学者が哲学者と呼ばれるゆえんです。なぜなら、われわれ日本人が「哲学者」と訳している言葉は、古代ギリシアで生まれたものですが、もともとそれは、「知に恋い焦がれる者」といったことを意味していたからです。この意味で、哲学は限界まで思考し尽くそうとする、極端な思考です。しかしそれは、哲学の求めているものが「極端」、すなわち、すべてのものの根元だったり、われわれ人間が知りうるものや思考しうるものの限界だったり、究極的な意味で「ある」「存在する」と言えるのは何か、ということだったりするためなのです。

わたしが現在専門的に研究しているのは、M・ハイデガーとL・ウイゲンシュタインという、20世紀前半に活躍した哲学者です。なぜそんな昔の哲学者を研究しているのかと言えば、わたしの目から見ると、極端を売りにしている哲学者のなかでも彼らがきわめつきの極端だからです。前者は伝統的に「存在論」と呼ばれてきた分野で、後者は比較的新しい分野である「言語哲学」のフィールドで、とても極端なことを言っています。両人とも、そのあまりの極端さゆえに、哲学者・哲学研究者の中にも「アンチ」が多い。しかしわたしにはそこが魅力的なのです。正確に言うと、わたしは彼らを「研究している」というよりは、彼らの極端な思考をモデルにして自分なりの極端な思考を紡ぎ出そうと日々四苦八苦している、といったところです。まだまだ、納得のゆく極端には達していませんが。





My Research

「啓蒙の世紀」の詩を研究すること

文学部・仏文学専攻 [准教授]

井上 櫻子 Sakurako Inoue

専門領域：18世紀フランス文学・思想

研究内容：「18世紀は哲学の世紀であり、詩的精神は死滅した」という従来のフランス18世紀の捉え方に疑問を抱いたことを出発点として、自然との中で生きる人々の感情を描く18世紀特有のジャンル「描写詩」の発展と、啓蒙思想家ルソーやデイドロの人間論、美学的考察との関係について研究しています。また、19世紀以降のフランス詩の発展と描写詩の関連にも興味をもっています。

私の専門分野は18世紀のフランス文学と思想全般です。なかでも四季の変遷とともに移り変わる自然の諸相と、その中に生きる人間の情緒的経験を描いた18世紀特有のジャンル、描写詩を中心に研究を進めてきました。「描写詩」という言葉は耳慣れないかもしれませんが、実は、フランスでもあまり研究の進んでいないジャンルです。

18世紀のフランスと言えば、世紀の終わりに、近代民主主義の確立に大きく影響したとされるフランス革命の起こった時代であるとか、モンテスキュー、ヴォルテール、ルソーなど多くの思想家が活躍した「啓蒙の世紀」であるというイメージが強いかもしれません。そして、20世紀後半の18世紀研究において注目を集めたのはこうした思想家たちの著作であることも確かです。そのような状況で、一部の文学ジャンル、特に韻文についてはフランスでも本格的な研究対象となることがありませんでした。「18世紀は哲学の時代であり、詩的精神は死滅した」とみなされることすらありました。私の研究は、こうした考え方に疑問を抱いたことから出発しています。

実際、描写詩をひもといてみると、詩人たちはさまざまな自然現象、多様な植物や動物、そして人間の細やかな感受性の動きを描く行為を通して、同時代の思想家と同様、事物の本性を解き明かそうとしていたことがわかります。18世紀には思想家デイドロとその協力者たちのたゆみない努力により、当時の知の集大成である『百科全書』が編集、刊行されましたが、詩人たちもまた、自然の事物の描写を通して百科全書的知に到達しようとしていたのです。

研究の出発点から私が最も関心を寄せているのが、ジャン＝フランソワ・ド・サン＝ランペール (1716-1803) という詩人です。なぜなら、彼の著作は、描写詩を手がけた詩人が、同時に哲学的

関心を有していたことをよく伝えているように思われるからです。サン＝ランペールは『四季』(初版1769)という作品を発表して、描写詩というジャンルを確立した詩人として知られていますが、彼はまた同時に『百科全書』に経済、政治、道徳関連の項目を30近く執筆し、啓蒙主義の金字塔ともいべきこの大事典の刊行に貢献しました。さらに、韻文『四季』に展開される感受性についての思索は、『百科全書』の編集者デイドロの人間論と通底するところがあり、サン＝ランペールは詩作においても百科全書派としての思想的立場を保持しようとしていたことが確認できます。貴族の出身で国王軍に従軍したサン＝ランペールが、匿名を貫いたとはいえ、王権や教権に批判的な議論を展開し、禁書処分まで処された『百科全書』に寄稿していたというのは興味深いことです。

現在は、フランスで進行中の『百科全書』電子批評版の拡充をめざす共同研究班に参加し、特にサン＝ランペールの執筆項目について注解を作成する作業に携わっています。フランス人はオリジナリティを大切にすることでよく知られていますが、相手が外国人であっても研究そのものの意義や新しさを認めて対等に接してくれるのは、本当にありがたいことだと思っています。





My Research

都市空間に 埋め込まれたモノと 技術から〈社会〉を 読み解く

文学部・社会学専攻 [教授]

近森 高明 Takaaki Chikamori

専門領域：文化社会学、都市社会学、歴史社会学

研究内容：都市文化現象(思想、表象、技術を含む広義の文化現象)にあらわれる近代性(モダニティ)の諸相を社会学的に考察する、というのが主な研究テーマです。現在はとくに照明・交通・建築など、都市の社会生活を支える基盤的テクノロジーが、都市をめぐる知覚・想像・経験様式の変容と結び合いつつ、独特の厚みをもつ社会性を獲得してゆく歴史のプロセスに関心をもっています。

慶應義塾大学文学部の社会学専攻は、社会学とともに、社会心理学、文化人類学という三つの分野で構成されている点に大きな特徴があります。三つの視座を横断的に学ぶことで、人間の社会生活を総合的に理解することが目指されています。

私は自分の研究分野について、「都市空間論」または「都市の技術社会史」と名乗っています。そのときどきの文脈で使い分けをしており、一方で、現代の都市空間の特徴にフォーカスするときには「都市空間論」という看板を出し、他方、都市的環境を支える基盤的な技術について、その成立過程を歴史的に問うときには「都市の技術社会史」と名乗っています。

研究のお手本になっているのは、W.ベンヤミン、G.ジンメル、W.シヴェルブシュといったドイツ系の思想家や社会学者、社会史家の仕事です。彼らはパッサージュ(鉄とガラスでできたアーケード)や額縁、列車の座席のクッションなど、一見些末な事象を深掘りするなかで、集合的な知覚や想像力の隠れたパラダイム転換を引き出してくるという、共通した思考のスタイルを示しており、彼らのみごとな手際に魅了されて、同じような仕事がしてみたいと思ったわけです。

研究の基本的態度として、彼らの少しひねくれた姿勢を引き継ぎたいと思い、なるべく正統的ではない、「なにそれ?」と思われそうな研究テーマを選んでいきます。

たとえばショッピングモールやコンビニエンスストアなど、複製的な消費装置が増殖している現在の都市空間を問うとき、通常のスオ学者であれば、それらの消費装置を悪者扱いし、どこもかしこも均質化する状況を嘆くというのが常套的な立場となります。それに対して私としては、複製的な空間を一律に悪者扱いするよりも、それらの空間が何をもちたらし、現在の都市空間がどのように変容しつつあるのかを、もう少しニュートラルに

見極めた方がよいのではと考えています。これは、写真や映画などの複製技術が芸術を堕落させるとみる守旧派に対して、その逆に、複製技術が芸術の新たな経験可能性を切り拓いた面もあると論じた、ベンヤミンの立ち位置を意識した問題設定です。

また技術社会史的研究としては、これまでに「地下鉄」「地下街」「街灯」「エアコン」「電柱」「送電鉄塔」といった主題を扱ってきました。社会学では通常、人びとの社会活動に主要な焦点があてられ、都市の空間や装置や技術は、そうした社会活動の容器や環境、背景であるにすぎないと軽視されるところがあります。しかし、自明の環境をなす空間や装置や技術には、私たちが形成する〈社会〉のいわば無意識的なクセが織り込まれており、それを読み解くことで〈社会〉の現在のあり方を逆算的に引き出すことができるのではないかと考えています。

人びとが生活を営む都市空間を、無味乾燥なモノの次元に還元すればするほど、そこに意外なかたちで人間臭さが浮かびあがる—— そのような「都市空間論」と「都市の技術社会史」を目指しています。



Alumni Voice



文学部で過ごした時間は私の財産

宮脇 麻里 さん

国府台女子学院 教諭
文学部日本史学専攻(2012年度卒業)

履修の自由度が高いのが大きな魅力

高校生のころ、大学では日本史を研究したいという夢を持ち、特に興味があった近世史や近代史について専門の先生がいる慶應義塾大学文学部を志望しました。福澤諭吉の『福翁自伝』を読み、その時代を生きた人の視点から見た歴史の面白さに触れて、慶應義塾ならこの時期の史料をたくさん研究できるのではないか、と思ったのもきっかけです。

一方で、高校生のときには言語学など他の分野にも興味を持っていました。そのため、1年生のうちには教養課程で多様な学問に触れ、その後、2年生から専攻に分かれる、という履修の自由度の高さに大きな魅力を感じました。最初の志望通り日本史学を専攻しましたが、多分野にわたる教養科目で学んだ経験はその後もずっと生きています。

幅広い学びと交友関係で世界が広がった

日本史学専攻では本物の史料に多く触れ、史料を読み解く楽しさに夢中になりました。歴史の教科書に名前が出てこないような人でも、史料の中ではいきいきとした登場人物となって現れます。それが史料を読む喜びとなり、自分なりの根拠を持って表現する力も養われました。先生方との交流にも恵まれ、史料の調査旅行に同行したり、研究会とその後の懇親会でお話したり、親しんで接することができました。進路のことについてもよく相談に乗っていただき、感謝しています。

また、他専攻や他学部の授業も履修でき、哲学専攻の「心の哲学」や、美学美術史学専攻の「芸術学」、経済学部の「経済史」などの授業を受けたことが印象的です。特に、経済学部の「経済史」は、同じ歴史であっても文学部の史学専攻と研究の手法が異なることがあり、興味深かったです。

教職課程や学芸員課程で、専攻を越えた友人と励まし合いながら実習をしたことや、海外からの留学生と一緒に古文書解読に奮闘し、キャンパスで語り合ったのも忘れられない思い出です。このような幅広い学びと交友関係から、自分の世界を存分に広げることができた学生生活でした。

探究する面白さを伝えたくて教職の道へ

卒業後は、自分が大学で実感した、何かを深く探究する面白さを伝えたくて、教職の道に進みました。担当している「社会」の授業では、一つの事柄を扱うときも、異なる見解であったり、背景の人間模様であったり、奥行きのある情報を盛り込むよう心掛けています。多くの生徒が社会の出来事に関心を持ち、熱心に耳を傾けてくれるのがとても嬉しいです。もし授業を通して生徒たちの知的好奇心を刺激できたとすれば、大学で多くの人と出会って学びを深められたおかげだと感じています。

大学生活を振り返れば、自分の興味や関心を出発点にして、ぐんぐん世界が広がった日々でした。慶應義塾大学文学部は自分が好きなこと、知りたいことをとことん探究できる場所。さまざまなバックグラウンドを持つ人たちとのたくさんの出会いと、ここで過ごした時間は必ず大きな財産になるはずです。



原点であり仕事に結びついた 文学部の学び

廣川 裕輔さん

NHK報道局 ニュース制作部 記者
人間科学専攻(2006年度卒業)

「生きるとは何か」を捉えたくて人間科学専攻へ

慶應義塾大学文学部の人間科学専攻で学び、魅力的な先生方との出会いがあったおかげで、今の仕事に就いたと言っても過言ではありません。

1年生のときに広く学ぶ中で専攻をどうするか考えましたが、私の場合は「生きるとは何か」を広い視点で捉えたいと思ったので、心理学出身の先生や医療人類学を専門とする先生が在籍する人間科学専攻に決めました。学びを進めていくと、フィールドワークやインタビューなど、現場で直接、話を聞いて、さまざまな社会問題を解き明かしていく、というスタイルが、自分の嗜好に合っていると思いました。

震災の特集で大学での学びが形に

終末期医療に興味があったので、医療人類学専門の先生のもと、卒論の研究ではがん患者の方々にたくさん話を伺いました。自分がやりたくて始めた研究でしたが、センシティブなテーマですし、実際にインタビューのアポイントメントを取るとなると腰が重くて…。そのとき先生から「一番やりたい研究は時間がかかる」と声をかけてもらい、先生にも同じような体験があるとお聞きしたことで気持ちがふっと楽になったのを覚えています。

先生からは、どうすればそこに根付く文化や思想を読み解いていけるのか、人の心に迫れるのか、といったインタビューの仕方や、フィールドワークに臨む姿勢など、今の仕事に直結する基礎を叩き込んでもらいました。人間科学専攻での学びは、まさに私の原点で、仕事でも役に立っています。

NHKに就職して7年間を東北地方の放送局で記者として過ごしました。仙台放送局にいるときに東日本大震災を経験し、震災後の混乱の中、宮城県内で犠牲者の火葬が間に合わず、一時的に土葬を行う「仮埋葬」が行われていたことを知りました。知られざる震災の姿として丹念に取材をし、全国ニュースで震災後3年目の特集として取り上げましたが、これはまさに大学時代、先生のもとで人の生と死に向き合う研究をしていたことが一つの形になったもの。大規模災害が起きた直後に直面する埋葬の在り方についても、問題を提唱できたかと思います。

自分の琴線に触れることを見つけてほしい

慶應義塾に入って良かったと思うのは、国内外からさまざまな人材が集まっていること。それぞれに志が高く、“芯”をしっかりと持っている仲間たちと、互いに切磋琢磨しながらも多様性を認め合う雰囲気があったので、一気に世界が広がりました。卒業後もそれぞれ、色々な業界で活躍している仲間たちに恵まれ、本当に良かったと思います。

私の場合は仕事に直結しましたが、たとえそうでなくても、慶應義塾大学文学部での学びは自分の血となり、肉となって、生涯、自分を支えてくれるものです。入学する前から何を大学で研究したいのか決めておく必要は全くないので、大学生活の中で自分の琴線に触れることは何か、ぜひ見つけてもらいたいですし、見つけられたら一生懸命、研究に取り組んでもらいたいと思います。自分自身と向き合わなければいけないときも必ず出てくるでしょうが、その先にきっと、将来の支えになるものを手に入れられるはずです。

Philosophy

哲学

幅広い領域を 普遍的な視点から研究

哲学は人類最古の学問のひとつです。しかし、実は哲学のその「古さ」は、つねに「新しさ」をも含んでいます。なぜなら、哲学をすることは、この世界に生きる誰もが感じ、多少とも疑問に思っているような事柄を、もう少し厳密にそして首尾一貫して考えてみようとする、人間の普遍的な衝動の発露にほかならないからです。つまり、哲学は普遍的であるからこそ、歴史的には他の学問に先んじて生じながらも、けっして古くさくなくなることなく、私たちにとってつねに新しくあり続けるのです。

哲学のこの古さと新しさ — 哲学の普遍性 — を体現するのが、まさに本専攻であると言えます。本専攻の伝統的な特徴は、最も古きものと最も新しきもの、つまり古典と現代という二極に教育・研究の軸を置きながら、普遍的な哲学的問題をめぐって両極が相互の理解と協力へと開かれているという点にあります。一方の、古代哲学から中世哲学までの古典研究においては、ギリシア語、ラテン語が飛び交い、哲学の原点にある諸問題が議論されながらも、現代の哲学的状況にとっての意義がつねに問題とされます。他方の、20世紀以降の現代哲学研究においても、論理学、分析哲学、科学哲学、現象学それぞれの最先端研究が追求されながらも、つねにその哲学的意義、つまり哲学的な根本性が、古典研究に照らして問い質されているのです。



アリストテレス『著作集』
(ヴェネツィア：1477年刊)



「ドゥッス・スコトゥス『任意討論集』」
(ヴェネツィア：1495-1498年刊)

	氏名	職位	専門領域
スタッフ紹介	荒畑 靖宏	教授	言語と心の哲学、解釈学
	上枝 美典	教授	西洋中世哲学
	柏端 達也	教授	行為論、現代形而上学
	金子 善彦	教授	西洋古代哲学
	斎藤 慶典	教授	現象学、西洋近・現代哲学
	田中 泉吏	准教授	科学哲学
	峯島 宏次	准教授	言語哲学、論理学、意味論・語用論

Ethics

倫理学

思想を通して 「人間の生き方」を考える

倫理学は、「人はどう生きるべきか」を問おうとする学問です。グローバル化の著しい進展により従来の価値観が揺らぐ現代において、誰もこの問いを避けて生きることはできません。倫理学専攻では、この問いに答えるためのさまざまな理論的枠組み(義務論や功利主義、正義論、徳倫理学、自然法論、メタ倫理学など)を学び、倫理学の一次文献を自ら読み解く技術を身につけることができます。

慶應義塾の倫理学専攻には6人の専任教員がいます。伝統的に、近現代のドイツ・フランス・イギリスの倫理思想とその歴史を専門領域とする教員が多いのですが、それ以外の領域についても多くの科目を開講し、学生の幅広い関心に対応しています。現代の社会問題を問い直す応用倫理学(生命倫理学や環境倫理学、情報倫理、ビジネス・エシックス、グローバル・エシックスなど)や、キリスト教を中心とした宗教思想、法・政治思想の研究や教育にも力を入れています。



アテナイの学堂



フランス人権宣言



イエス像

	氏名	職位	専門領域
スタッフ紹介	石田 京子	准教授	ドイツ倫理思想、法哲学
	エアトル, ヴォルフガング	教授	倫理学史、形而上学、現代倫理学
	柘植 尚則	教授	イギリス倫理思想史
	奈良 雅俊(哲龍)	教授	現代フランス哲学、医療倫理学
	村上 暁子	助教	現代フランス思想・宗教思想
	山内 志朗	教授	西洋中世・近世思想、倫理学と形而上学

Aesthetics and Science of Arts

美学美術史学

古代から現代まで 古今東西の「美」を学ぶ

美学・芸術学、美術史学、音楽学、ならびにアート・マネジメントを主要な研究領域とします。美学・芸術学とは、主として芸術一般における制作・作品理解に関する諸問題を理論的に考察する学問です。概論や各論のほか、近現代以降の諸芸術メディアにみられる多様な問題が扱われます。美術史学とは、西洋および日本・東洋の各時代における絵画、彫刻、工芸、建築等の実証的および歴史的研究を行うものです。西洋、東洋ともに、美術の通史をとりあげる概説があり、これに加えて、多種多様な国や地域、時代の美術を幅広く取り扱う各論の講義が設けられています。

音楽学は、作曲家とその作品、およびそれらをとり巻く様々な事象を歴史的・理論的に研究する学問です。西洋音楽の概説や中世から現代までの各論のほか、日本の近現代音楽や伝統音楽に関する講義も開講されています。

以上の専門研究の基盤として、芸術研究基礎・美学美術史学演習などの入門講義が用意され、また原典講読において少人数の演習がおこなわれます。なお、3・4年生は研究会に所属し、卒業論文の作成指導を受けることが必須条件です。



遠山ゼミの様子



日本美術作品の調査実習



美美旅行

スタッフ紹介	氏名	職位	専門領域
	金山 弘昌	教授	西洋美術史
	後藤 文子	教授	西洋美術史
	遠山 公一	教授	西洋美術史
	内藤 正人	教授	日本美術史
	中尾 知彦	准教授	アーツ・マネジメント
	西川 尚生	教授	音楽学、西洋音楽史
	林 温	教授	日本美術史
	福田 弥	准教授	音楽学、西洋音楽史
	望月 典子	教授	西洋美術史、芸術学

Japanese History

日本史学

日本史を通じて 人間の営みと社会の動きを考える

日本史学専攻では、歴史学を中心として広くさまざまな分野の学問の方法を学びつつ、通時代的な歴史像の把握に向けて日本史全般に関する知識の修得に努めます。また、史料から歴史情報を引き出すための基礎的能力を養うとともに、その成果を論理的に構成して発表することができる能力を磨きます。

日本の歴史に対する理解を通じて培った、人間の営みと社会の動きに対する視野と洞察力を併せ持つことで、社会人、研究者、教育者として、社会に対する独自の貢献ができる人物を育成します。

日本史学専攻には、古代から近代まで、合わせて7人の専任教員がおり、キリシタン史を含め特色のある研究・教育を行っています。学生は古い時代から新しい時代まで、また方法論的にも多面的に学習することができます。



京都・二条家の簿冊の山



資料整理の様子



秋田藩城内での百姓の酒宴

	氏名	職位	専門領域
スタッフ紹介	浅見 雅一	教授	キリシタン史、中国天主教史
	井奥 成彦	教授	近世 — 近代日本社会経済史
	上野 大輔	准教授	日本近世史
	十川 陽一	准教授	日本古代史
	中島 圭一	教授	日本中世史
	藤本 誠	准教授	日本古代史
	前田 廉孝	准教授	近代日本経済史・経営史、日本植民地関係史

Asian History

東洋史学

アジア、中東・イスラーム世界を歴史的に捉える

東洋史学専攻では、アジアおよびイスラーム世界を中心とする地域の政治・経済・社会・文化および国際関係を歴史的に捉えて、人々の多様な価値観を理解する力を養います。この地域に関するユニークなテーマを見つけて、学術的な研究文献や一次資料を読み解き、論理的に考察して表現することを目指しています。

アジア・イスラーム世界や歴史学に対する興味を多様な進路につなげていくことができますが、在学中に培った外国語の能力を活かして、国際社会で活躍したり、国際交流の分野に貢献したりする道も開かれています。

東洋史学専攻には、中東・イスラーム世界および東アジアを専門とする5人の専任教員がおりますが、そのほかの地域に関する授業も豊富に設置されており、また近現代・近世・中世・古代のいずれの時代も専門的に勉強することができます。



イスタンブルのスレイマニエ・モスク



エジプト最南端の町アスワンで
ナイル川を臨む



上海の洋食レストラン・徳大西菜社
(1897年創業)

氏名	職位	専門領域
岩間 一弘	教授	東アジア近現代史、食の文化交流史、中国都市史
勝沼 聡	准教授	近現代中東社会史、アラブ近現代史
桐本 東太	教授	中国古代史、中国民俗学
長谷部史彦	教授	中東社会史、地中海交流史
藤木 健二	准教授	オスマン帝国史、中東都市社会史

スタッフ紹介

Western History

西洋史学

現代の「国際社会」を構成する 多様な価値観を理解する

古代から現代までのヨーロッパやアメリカなどいわゆる西洋世界と、そこから強く影響を受けた地域の過去を学ぶことを通して、現代の「国際社会」を構成する多様な価値観を理解する力を持った社会人、教育者、研究者を育成します。そのために、自ら情報を収集し、それを学問的に分析するために必要な外国語力と、学問の方法論を身につけることに重点を置いています。

外国語の習得には特に力を入れており、2年次と3年次の必修科目において、英語と、英語以外のヨーロッパ言語で専門書を読む力を鍛えます。また、3年次から2年間連続して履修するゼミと、卒業論文の執筆を通して、語学力と方法論を実践的に運用し、主体的に資料を集め、理論的に考察し、論文にまとめあげる総合力を身につけられるように指導します。

多様な地域や時代を専門とする専任教員の存在に加え、幅広いテーマを対象とした非常勤講師による授業も数多く開講しており、多様な地域の歴史や文化を学ぶことができるのも特徴です。



スペイン内戦の弾痕が残る教会



南仏ニームのメゾン・カレ



18世紀の手稿史料

	氏名	職位	専門領域
スタッフ紹介	神崎 忠昭	教授	西洋中世史
	清水 明子	教授	ドイツ現代史・ユーゴスラヴィア史
	野々瀬浩司	教授	スイス宗教改革史、農村社会史
	長谷川 敬	准教授	古代ローマ史(社会経済史)
	山道 佳子	教授	スペイン(カタルーニャ)近代史
	吉武 憲司	教授	西洋中世史(イギリス中世史)

Archaeology and Ethnology

民族学考古学

文献のみならず多様なモノを 資料に歴史を研究

文献のみならず、多様なモノを資料に歴史を研究する専攻です。現在、専攻が所蔵する資料・標本類は国宝や重要文化財も含めて20万点以上。それらは大正期より幾多の発掘・民族調査が重ねられた結果、収集されたものです。専攻生はそれら貴重な資料を研究対象とし、専任教員が国内外で展開する調査に参加することもできます。フィールドワークを重視し、また扱う地域・時代に制限を設けない当専攻には、考古学・民族学・人類学の概論科目や調査に必要な方法論・技術を学ぶ科目、日本、北アジア、オセアニア、オリエント、ヨーロッパに至る多様な地域を扱う民族学・考古学の専門科目など多岐に亘る科目が設置されています。専任教員を通して、言語文化、建築史、生態学、文化人類学といった関連領域との幅広い連携も経験できます。これらの科目や経験から多様な知識を得、フィールドワークで観察力と対話力を養い、また研究会で発表を重ね、卒業論文を仕上げる中、社会人に等しく必要な論理的思考力とプレゼンテーション能力も習得します。



展示実習の様子



発掘調査(尻労安部洞窟)



ウリ像(ニューアイルランド島)

	氏名	職位	専門領域
スタッフ紹介	安藤 広道	教授	日本考古学・博物館学
	佐藤 孝雄	教授	動物考古学、民族考古学
	下田健太郎	助教(有期)	文化人類学、歴史人類学、物質文化研究、災害研究
	杉本 智俊	教授	西アジア考古学、聖書考古学
	山口 徹	教授	オセアニア島嶼世界のジオアーケオロジー、歴史人類学、博物館人類学
	渡辺 丈彦	教授	旧石器考古学、日本古代史、文化財行政学

国文学

言語、文芸をはじめ 日本の文化全般が研究対象

国文学専攻は、国文学および日本語学を中心に、学芸、習俗など広く日本文化の歴史と現在について専門的に学ぶ専攻です。

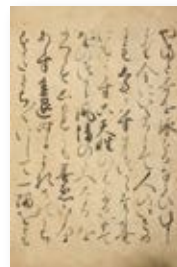
本学国文学専攻の文学研究の一大特色は、書誌学などを基礎とする実証的で厳密な研究方法にあります。日本語についてもその言語としての諸側面を理論的・体系的・実証的に学ぶことができます。

そうした学問的な厳格さは保ちながらも、自由な雰囲気のもと固定観念や偏見にとらわれない柔軟な見方で、広く学び深く考えてゆこうというのが、本学国文学専攻の伝統的な雰囲気です。

単なる物知りではなく、みずからの問題意識に基づいてテーマを設定した上で、独力でデータ・資料を収集し、論理的な分析・考察を行って課題を解決して、自分のことばで発表できる人材の養成を目指しています。そうした能力を社会に出てから直面する多様な問題・課題を解決するために活用でき、生涯、学習を継続する姿勢を保つ、自立した責任ある社会人・教育者・研究者を育成してゆくことが本専攻の目標です。

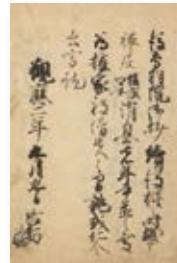


やひやう糸ねすみ(弥兵衛鼠)



小村雪岱画稿

後鳥羽院御口伝



	氏名	職位	専門領域
スタッフ紹介	石川 透	教授	物語文学、説話文学
	小川 剛生	教授	中世文学、和歌文学
	小平麻衣子	教授	近代日本文学
	栗本賀世子	准教授	中古文学
	恋田 知子	准教授	中世文学
	合山林太郎	准教授	日本漢文学(近世・近代)
	屋名池 誠	教授	日本語学(国語学)

Chinese Literature

中国文学

中国の伝統的文化を学び 現代中国の動向にも向き合う

中国文学専攻では、日本に大きな影響を与えた中国の伝統的文化を学ぶと同時に、現代中国の動向にも向き合う姿勢を重視しています。

「中国語学」「現代文学」「古典文学」を三本柱としつつも、いわゆる「文学」の枠組みにとらわれず、歴史・思想・芸能などを含むあらゆるジャンルを研究の対象としています。近年では台湾を含めた現代社会や映画・サブカルチャーを研究対象にする学生も増えています。

様々な研究や活動のためには、現代中国語のスキル向上が必須です。そのために、各学年に文法・読解中心の科目と、ネイティブ教員によるコミュニケーション重視の科目を設置し、効率的なカリキュラムを構築しています。

欧米とは異なるスタンダードを有する中国と向き合うことで、世界を見つめ、日本のあり方をも見つめる新たな視座を獲得できるはずです。中国文学専攻では、古典から現代まで時代・分野を問わず、躍動する中国に関心を持つ学生を歓迎します。



敦煌・莫高窟



四庫全書

李白

	氏名	職位	専門領域
スタッフ紹介	浅野 雅樹	教授	中国語学
	杉野 元子	教授	中国近現代文学、日中比較文学
	須山 哲治	准教授	中国古典文学
	高橋 智	教授	中国古典文学、中国版本学、日本漢籍受容史
	松倉 梨恵	助教	中国現代文学
	吉永 壮介	准教授	中国古典文学

English and American Literature

英米文学

英米の文化・言語を 幅広く学ぶ

英米文学専攻の扱う領域は、英語という言語自体から英語によって築かれた文化一般にいたるまで広範囲におよびます。英語運用力といった基礎的な技能は、言語や文化をより深く理解するための一手段として位置づけられることになります。

当専攻では、戦前から野口米次郎(イサム・ノグチの父)、戸川秋骨、西脇順三郎(ノーベル文学賞候補)、厨川文夫といった先達によりアカデミズムを重視する学統がつつちかわれてきました。この伝統を受け、現在も学生の広く深い関心に対応できるよう、種々の教授陣および多岐にわたる講義を用意しています。中世から現代にいたる英文学に関する講義・演習、植民地文学からポストモダン文学にいたる米文学に関する講義・演習、古英語から現代の言語学研究にいたる英語学に関する講義・演習、さらに映画や音楽などの欧米文化と文学との接点を多角的に取り上げた学際的講義など、日本でも類を見ないほどの充実したカリキュラムによって、学生の興味はさらに広がっていくと確信しています。



受胎告知
(15世紀後半制作写本の細密画)



機を織る聖母マリア
(15世紀制作写本細密画)

博物館の芸術家(チャールズ・W・ピール)

氏名	職位	専門領域
赤江 雄一	准教授	西洋中世史
井口 篤	准教授	中世英文学 (14-15世紀のラテン語・中英語宗教散文)
井出 新	教授	初期近代イギリス文学・演劇
井上 逸兵衛	教授	英語学・社会言語学・談話分析
宇沢 美子	教授	アメリカ文学、アメリカ研究
大串 尚代	教授	アメリカ文学、女性文学
加藤有佳織	助教	北米文学
コミサロフ, アダム	教授	異文化コミュニケーション、異文化適応
坂本 光	教授	近現代イギリス文学
高橋 勇	教授	近現代イギリス文学、ファンタジー文学

スタッフ紹介

氏名	職位	専門領域
高橋 宣也	教授	近代イギリス文学
巽 孝之	教授	アメリカ文学、現代批評理論
徳永 聡子	准教授	中世イギリス文学、書物史、書誌学
バナード, ピーター	助教	日本近代文学、比較文学、幻想文学、ゴシック論
原田 範行	教授	近現代イギリス文学、比較文学、出版文化史、文学教育論
辺見 葉子	教授	中世イギリス文学、ケルト語文学、トールキン
堀田 隆一	教授	英語史、歴史言語学
松田 隆美	教授	中世イギリス文学

German Literature

独文学

ドイツ語圏の文化を 領域横断的に研究

独文学専攻の対象は「ドイツ」にも「文学」にも限定されません。ドイツ、オーストリア、スイスの言語と文学を中心に、映像、舞台、美術、音楽、思想、歴史、政治、建築、メディアなど、ドイツ語圏の豊かな文化全般を扱うのが当専攻なのです。

独文学専攻のカリキュラムは、ドイツ語母語話者2名を含む9名のスタッフのもとで、ドイツ語運用の四技能(「読み」・「書き」・「聴く」・「話す」)がバランスよく修得できるよう設計されています。学生は、そのスキルを駆使してドイツ語圏の文化を広く、また深く学び、4年次にはその中から関心のあるテーマを選んで探究し卒業論文に結実させます。在学中に留学をする学生も少なくありません。

独文学専攻の淵源は、慶應義塾ではじめて「独文学」が講じられた1910年に溯ります。以来、当専攻は意欲と知的好奇心に富む学生たちを迎えてきました。教員と大学院生や学部生の間関係が密で、コンパや合宿や読書会など、交流の機会が豊かであることを良き伝統の一つです。卒業生たちの進路はドイツ語圏の知識を生かす職種の他、通信、出版、製造、金融、ITなど社会の広い分野に開かれています。



フリッツ・ラング『メトロポリス』

ブレーメンの音楽隊

ヨーハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ

スタッフ紹介	氏名	職位	専門領域
	川島建太郎	教授	現代ドイツ文学・思想
	糸川麻里生	教授	近現代ドイツ文学・思想、文化史、スポーツ史
	香田 芳樹	教授	中世ドイツ文学
	斎藤 太郎	教授	近代ドイツ文学
	識名 章喜	教授	近現代ドイツ文学・文化学
	田中 慎	教授	ドイツ言語学、言語理論
	平田栄一郎	教授	演劇学・ドイツ演劇
	ベッカー、アンドレアス	訪問講師(招聘)	映画、メディア学
	ヨッホ、マルクス	教授	近現代ドイツ文学・文化学

French Literature

仏文学

広汎なフランス語文化研究を きめ細やかに指導

仏文学専攻では、フランス語およびフランス文化を通じて、学生諸君が社会的・文化的事象を多角的にとらえる能力と、高度で実践的な語学力を身に付けることを目指しています。

フランス滞在を終えた永井荷風が慶應義塾に就任し、私たちの専攻が実質的に誕生したのは1910年のことでした。以来百年以上にわたって、文学・芸術の分野にとどまらず、メディア、通信、実業界など、さまざまな世界で活躍する人材を輩出しています。

当初は小さな組織だった本専攻も、現在では、さまざまな分野や時代をカバーする10名以上の専任スタッフを揃えるに至りました。狭い意味でのフランス語学・文学の領域にとどまらず、思想、社会、歴史、食文化やモード、映画や舞台芸術、美術、音楽、ネット時代のメディア等、学生諸君の幅広い関心に応えられる組織となっています。

在学中に留学する学生が多いのも私たちの専攻の特徴です。慶應義塾では高等師範学校、パリ第3大学など数多いフランスの大学、さらにスイスのジュネーブ大学、カナダのモントリオール大学などと交換協定をもっており、当専攻からは特に多くの在学生がこれらの留学制度を利用しています。



専攻の大先輩、遠藤周作の学んだフランスの古都リヨン



知の集大成、
フランス国立図書館



ノルマンディ地方カーン近郊にある
現代出版記憶研究所 (IMEC)

	氏名	職位	専門領域
スタッフ紹介	芦野 文武	准教授	語彙意味論(フランス語、日本語)
	市川 崇	教授	現代フランス文学及び思想
	井上 櫻子	准教授	18世紀フランス文学・思想
	荻野 安奈	教授	フランス文学(16世紀)
	小倉 孝誠	教授	近代フランスの文学と文化史
	片木 智年	教授	おとぎ話論、17世紀フランス文学・演劇
	喜田 浩平	教授	フランス語学
	築山 和也	教授	19世紀フランス文学
	西野 絢子	准教授	現代フランス文学・日仏演劇交流
	ブランクール, ヴァンサン	訪問教授(招聘)	フランス文学
	峯村 傑	教授	近現代フランス文学
	宮林 寛	教授	近代フランス文学

Library and Information Science

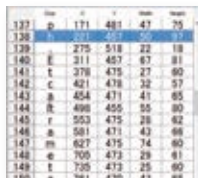
図書館・情報学

日本における図書館・情報学の研究、教育のパイオニア

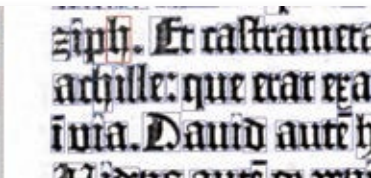
図書館・情報学専攻では、個人や機関により生産された経験や情報、知識について、その流通、組織化、提供、利用、保存といった諸側面の基本的な知識と、情報の視点から問題を発見し自ら解決できる能力の習得をめざします。

前身である図書館学科は、1951年米国の援助のもと日本で最初の大学における図書館員養成機関として設立されました。ロバート・ギトラーは、設置大学の選考に際して、英訳福翁自伝に感銘を受け慶應義塾大学を選んだとされています。当初は5名の米国人教授、米国人司書による全て英語の授業で、通訳がついていました。

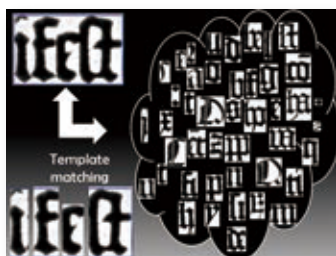
その後、図書館学だけでなく、さまざまな記録情報を扱う情報学も含めた図書館・情報学へと対象を拡大し、大学院も充実させて来ました。現在は図書館コース、情報メディアコース、情報管理コースの3コース制のカリキュラムをとり、図書館界に多くの優秀な人材を送り出すとともに、情報から人間と社会を考える能力を持つ人材を広く社会に送り出しています。日本における図書館・情報学の教育、研究のパイオニアとしての地位を築いてきました。



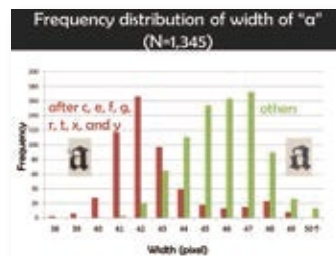
活字画像の識別



埼玉県立久喜図書館における健康医療情報の展示



テンプレートマッチング



活字の出現頻度の分析

	氏名	職位	専門領域
スタッフ紹介	安形 麻理	教授	図書館・情報学、書誌学
	池谷のぞみ	教授	エスノメソドロジー、情報行動、知識の社会学、サービスデザイン
	岸田 和明	教授	情報検索
	倉田 敬子	教授	学術コミュニケーション、図書館・情報学
	谷口 祥一	教授	情報組織化、情報資源組織化
	松本 直樹	准教授	図書館情報学
	宮田 洋輔	助教	図書館情報学

Sociology

社会学

社会や文化に対する 広い視野と深い洞察を育む

社会学専攻で学ぶということは、古今東西の多様な文化と社会に言及しつつ、現代社会の諸々の問題にとり組むことであり、そうすることで、人間を総合的に理解して、私たちの生を自ら作ることに繋げるといことです。

社会学専攻には社会学とともに、社会心理学と文化人類学などの領域が含まれています。この三つの学問分野を横断的に学ぶことが他大学の社会学専攻と大きく異なる特徴です。これら三分野の概論や社会調査、社会学史は必修科目になっています。そして、それを土台にして、自分自身の研究の方向性やスタイルをどのように作るのかが大事になります。その自由度は高く、そのための多様な科目が設置されています。

もしみなさんが、時代の変化に目を向けるとともに、社会や文化の各分野に対する広い視野と深い洞察力を育み、自主的で積極的な学習態度を身につけようとするならば、単なる知識ではなく、フィールドでの具体的な実践をも網羅する社会学の学習が可能になります。



ノーベル賞を受賞した社会学者ジェーン・アダムス



世界で最初の社会的実験室
(イギリス・エジンバラ)



渋谷交差点

	氏名	職位	専門領域
スタッフ紹介	李 光鎬	教授	メディア・コミュニケーション研究、普及研究、社会心理学
	岡田あおい	教授	家族社会学、家族史、歴史人口学
	岡原 正幸	教授	アートベース・リサーチ、感情社会学、障害学、パフォーマンス研究
	檜尾 直樹	准教授	文化人類学、宗教社会学、宗教学
	木下 衆	助教	医療社会学、社会調査法、家族社会学
	杉浦 淳吉	教授	社会心理学
	近森 高明	教授	文化社会学、都市社会学、歴史社会学
	三尾 裕子	教授	文化人類学、東アジア研究
	森川 剛光	教授	社会学理論、社会学史、社会科学の哲学、知識社会学、文化社会学、世界社会論

Psychology

心理学

厳密な実験と徹底的なデータ分析による実証研究

慶應義塾の心理学研究室は、創設者横山松三郎君のもとで1926年3月に実験室が開設され、1928年には文学部の正式な専攻となりました。

戦後、1951年に大学院（社会学研究科心理学専攻）、1952年には動物実験室、同時期に日吉キャンパスの研究室も開設され、これまでに多くの卒業生、研究者を輩出しています。

その歴史の中で研究室、実験室の移転やカリキュラムの改変を幾度か経ていますが、その研究・教育の理念の中心に厳密な実験と分析を基盤とした徹底的な実証研究による心理の探究があるという点は創設時から一貫しています。

現在は知覚・行動・認知・発達・生物・神経心理等の諸領域にわたる研究・教育をおこなっており、実験科学的なアプローチを用いているという点で文学部の中でも独特な専攻となっています。



オペラント箱を用いた動物実験



頭の認識を調べる心理学実験



脳波測定実験

	氏名	職位	専門領域
スタッフ紹介	伊澤 栄一	教授	生物心理学、動物行動学、神経行動学
	梅田 聡	教授	認知神経科学、神経心理学、認知心理学
	大森 貴秀	助教	発達心理学
	川畑 秀明	教授	感性科学、認知神経科学、実験心理学
	寺澤 悠理	准教授	認知神経科学、神経心理学
	兎田 幸司	助教	学習心理学、比較認知科学、行動神経科学、感性認知脳科学
	皆川 泰代	教授	言語心理学、発達心理学、認知神経科学
	山本 淳一	教授	発達心理学、臨床発達心理学、応用行動分析学

教育学

「人間形成」に関わる営為全般を視野に含めながら教育の本質を探究

教育学は、18世紀後半期以後の西洋先進諸国における近代学校制度の整備・確立を背景として成立・発展しました。今日でも、教育学は、各大学の教職課程に組み込まれている教科教育学や教育方法学などに代表されるように、一般的には教員養成や学校教育への貢献を目的とする学問として理解されています。

それに対し本専攻では、「人間形成」に関わる様々な営為全般を視野に含み込みながら、教育の本質を探究しています。それぞれの時代や社会における人々の生の営みには、学校教育の枠組みからは溢れ出てしまうような多彩な人間形成の営為が埋め込まれています。それらを再発掘し再評価することで、教育的営為や教育的知見の豊かな可能性を探究している点に本専攻の最大の特色があります。またその探究を、人文科学や社会科学はもとより、自然科学の方法をも駆使しながら展開している点にも本専攻の独自性があります。こうして「教育」を包括的な人間形成の関心に立って理解することで、学校教育の問題にも、より多角的で重層的なアプローチを提供できると考えています。



教育史散歩



ふたご親子による発達研究



幼児向け発達検査実習場面

スタッフ紹介	氏名	職位	専門領域
	安藤 寿康	教授	教育心理学、行動遺伝学
	藤澤 啓子	准教授	発達心理学、発達行動遺伝学
	眞壁 宏幹	教授	陶冶理論(人間形成論)、教育思想史
	松浦 良充	教授	比較大学史・大学論、高等教育思想史、アメリカ教育史、教育学教育論
	山梨 あや	教授	日本教育史、社会教育史
	山本 正身	教授	日本教育史、日本教育思想史、江戸儒学史
渡邊福太郎	助教	教育哲学、教育思想	

Human Sciences

人間科学

社会の中の「人間」を 多面的に把握する

社会的・経済的・文化的な環境変化の波によって、私たちの生命観、人間観、倫理観は常に揺さぶられています。固定した知的枠組みでは捉えきれない複雑な様相が、現代社会には内包されています。グローバリゼーション、経済・情報格差、大規模自然災害、情報技術、遺伝子操作など多種多様な問題がからみ合っ、人間の感性、価値観、ライフ・スタイルが大きく変貌し多様化しつつあるのです。このような社会にあって、人間科学専攻の使命は、社会、文化および自然をめぐる諸問題の理解と解決を志向して、人間性の多面的把握と、そのための新しい知的枠組みを、学際的視野から構築・探究することです。

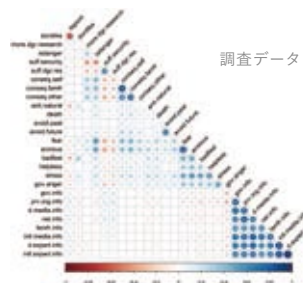
2年次は人間科学の基礎を学び、3年次からは特定の分野を専門的に学ぶための研究会に参加することができます。4年次は研究会に所属して卒業論文に取り組むコースと、卒業試験を受けるコースのいずれかを選択します。卒業後の進路は、就職（一般企業、マスコミ、教員、官公庁）から大学院進学まで多方面にわたっています。時代の変化に好奇心を向け、人間の問題を掘りさげて考えようとする学生を歓迎します。



アフリカでのフィールドワーク



実験室の様子



調査データ

	氏名	職位	専門領域
スタッフ紹介	稲葉 昭英	教授	計量社会学、社会統計学、社会調査法、家族社会学、福祉社会学
	今井 芳昭	教授	社会心理学(对人的影響、社会的影響力、集団過程論)
	織田 輝哉	教授	理論社会学、数理社会学、計量社会学
	北中 淳子	教授	医療人類学、精神医学史
	佐川 徹	准教授	人類学、アフリカ地域研究
	菅 さやか	助教	社会心理学
	常松 淳	准教授	社会学
	平石 界	教授	進化心理学、社会心理学

Natural Sciences

自然科学

諸科目を通じて自然科学の論理的な考え方を学ぶ

自然の一部である人間の理解には、生物的存在としての人間、物質的存在としての人間、人間を取りまく地球環境、さらには、この地球を含む宇宙の理解も不可欠です。したがって、生物学、物理学、化学を、それらの具体的な理解に不可欠な実験と共に学ぶことは極めて有益です。さらに、数学、天文学、地学、人類学、心理学と多様な自然科学系列の諸科目を通して自然科学の論理的な考え方を学ぶことは、文学部などの専攻にあっても、自然科学の豊かな教養と柔軟な思考力が役立つはずで

です。日吉1年次には、実験系科目と講義系科目が、三田の2年次以降には講義系科目が自然科学系列科目として開講されています。卒業までに8単位以上の取得が必要です。この他に、1年次には総合教育セミナーが、2年次以降には、自然科学研究会が開講され、より専門的かつ実用的な自然科学の知識、考え方が学べます。



中和測定



水素原子の発光スペクトル測定



化学実験室

	氏名	職位	専門領域
スタッフ紹介	岡本 昌樹	教授	触媒化学、多孔体材料
	倉石 立	准教授	発生生物学
	河野 礼子	教授	自然人類学、人類進化学
	杉山 晴紀	助教(有期)	結晶学・有機結晶学
	田口 瑞姫	助教(有期)	発生生物学、免疫生物学
	古川 亮平	助教	発生生物学、免疫生物学

Foreign Languages

諸言語

文学部の各専門を補い、 知識や理解を深める

グローバル化により世界の一体化が急速に進行している現代では、複数の外国語の習熟と、その背景にある文化・社会・歴史等についての相互理解が要求されます。これからの時代を担う学生に、できるだけ広い範囲の言語と文化を修得してもらうために、文学部には17専攻以外に諸言語部門が設置され、日吉から三田へと徐々にステップアップして各言語が学べるようになっていきます。

具体的には、ローマ帝政下のギリシア語散文文学を研究しているギリシア語・ラテン語教員、朝鮮半島(家族の変容・徴兵制)や日本(在日コリアン・漁民)をフィールドとして研究している朝鮮語教員、1920年代の前衛文学を中心にスペイン文化を研究しているスペイン語教員、文学(ダンテ)・哲学・神話・美術などイタリア文化を広く追求しているイタリア語教員がいて、文学部の各専門を補い、知識や理解を深めてくれます。また、諸言語部門の教員が、17専攻では扱わない研究分野の演習型授業(ゼミ・研究会)を全専攻共通科目として三田で開講しています。



スペインの前衛詩運動ウルトラリスモの詩の一例

古代ギリシア恋愛小説『レウキッペーとクレイトポーン』の16～18世紀の様々な刊本



ソウルでのアンケート調査

	氏名	職位	専門領域
スタッフ紹介	金 柄徹	教授	朝鮮語、文化人類学
	坂田 幸子	教授	スペイン語、スペイン文学・文化
	菅原 昭江	助教(有期)	外国語としてのスペイン語教育
	中谷彩一郎	准教授	ギリシア語、ラテン語、西洋古典学、比較文学
	藤谷 道夫	教授	イタリア語・イタリア文学、西洋古典学、比較文学

Graduate Schools

〔大学院〕

文学部は1学科17専攻と2部門から成っていますが、大学院は文学研究科と社会学研究科に分かれます。



知のさらなる深みをめざして

文学研究科

Graduate School of Letters



— 知の探求者として

文学研究科は、慶應義塾のなかでも最も古い研究科のひとつとして、人文学諸分野の研究に大きな貢献をしてきました。現在は哲学・倫理学、美学美術史学、史学(日本史学・東洋史学・西洋史学・民族学考古学の4分野)、国文学、中国文学、英米文学、独文学、仏文学、図書館・情報学の9専攻から成り、広く人文学全体をカバーして最高水準の専門研究を国際的に展開するとともに、修士課程独自のプログラムとして、アート・マネジメント、情報資源管理、日本語教育学の各分野では、高度な専門知識を備えたプロフェッショナルを養成しています。近年では専任教員免許の取得や学芸員資格等をさらに活かすために進学を希望する人も増えています。

修士課程及び後期博士課程の授業の大半は少人数の演習科目で、半期を単位として履修できるので、各自の専門的興味を反映した柔軟な履修計画をたてることが可能です。論文の指導教授以外にも、文学部の専任教員の多くが大学院科目を担当しており、さらに全学的な「スーパーグローバル事業」の

一環として、海外から著名な研究者を博士課程の学生の副指導教授として招聘することもあります。三田キャンパスには人文学分野のさまざまな研究所だけでなく、和漢洋の貴重書を数多く所蔵する慶應義塾図書館や斯道文庫があり、これらの機関と連携して歴史資料や貴重書を活用した研究や方法論を学ぶ環境も整っています。

学生の研究テーマに密着した丁寧な指導とキャリア支援は、文学研究科の一番の特色であり、少人数セミナーと個別の論文指導を通じて、学生は専門研究を深め、その成果を国際的に発信しています。海外の研究機関との交流も活発で、共同でのセミナーや海外研究者による講演会も毎月のように開催されています。

入学試験は修士課程が年2回(9月と2月)、後期博士課程が年1回(2月)おこなわれ、募集人員は修士課程が1学年135名、後期博士課程は45名となっています。

社会学研究科

Graduate School of Human Relations



— 「知の新たな生産者」の育成を目指して

社会学研究科は文学部人間関係学系の四専攻(社会学、心理学、教育学、人間科学)と経済学部・法学部・商学部・環境情報学部、メディア・コミュニケーション研究所・教職課程センターの専任教員が研究と指導を行う学際的な独立大学院で、社会学・心理学・教育学の三専攻から成っています。いずれの専攻においても、さまざまな文献を通じて既存の研究成果を学び、かつ、調査研究を着実にを行うための理論や調査・分析方法を体系的に修得することになります。さらに、現代社会の問題の解明に取り組むべく、知的流行を批判的に摂取しながらも、新たな角度から社会を分析する力を持つ研究者、換言すれば、「知の新たな生産者」を養成することもつねに意識し大学院教育を展開しています。

そのために社会学研究科では、三専攻にまたがった科目の設置、文学研究科との共同研究を推進するためのプロジェクト

科目の設置、院生の共同指導体制の確立などによって、領域横断的な研究教育体制を積極的に進めています。また、海外の大学との研究協定締結(Ex.ウィーン大学)やダブル・ディグリープログラム協定の締結(Ex.修士課程:ハレ・ヴィッテンベルク大学博士課程:南オーストラリア大学)、海外特別招聘教授による集中講義などを通して、研究教育体制の国際化を強力に推進しています。

卒業後の進路は、大学の研究者や中等教育機関の教員になる者のほか、公務員、シンクタンク、研究所、福祉関係、広告業、マスメディア等さまざまで、海外の大学・研究機関に留学をする者も少なくありません。

入学試験は年1回、定員は修士課程が1学年40名、後期博士課程は11名です。教育学専攻修士課程では、現職教員を対象とした入学試験も実施しています。

〔研究所〕



多彩な研究所設置講座

慶應義塾大学には、学部・研究科以外の幅広い活動の場として研究所・附属施設が多数設置されており、従来の学問領域にとどまらない柔軟な研究環境を構築しています。この中から文学部と関連の深いものを紹介します。多くの研究所には設置講座があり、所属専任・関連教員が、学生を指導しています。詳しい内容については、各ホームページ等を参照してください。



■ アート・センター

慶應義塾唯一の芸術を専門研究領域とする研究所です。博物館相当施設として、アート・スペース(三田キャンパス南別館1階)では年間を通じて展覧会を開催しています。また、研究会・公演などの各種催事の開催、アーカイブの構築、国内外における芸術資料の研究的活用の促進などの活動を通して、現代における芸術の問題に取り組んでいます。(三田)

■ 言語文化研究所

世界の諸言語、諸地域や各時代の文化・思想、言語学・言語理論などの研究を推進しています。学部では開設していない個別言語の講座を含むサンスクリット、アラビア語、古代エジプト語、ヘブル語、タイ語などの12言語におよぶ講座を開設しています。(三田)

■ 外国語教育研究センター

慶應義塾の外国語教育を全体的に捉え、活動する研究機関です。外国語教育に関する研究を推進するほか、特色ある外国語科目の開講や自律学習環境の提供を行い、国際舞台で通用する言語運用能力の習得をめざす塾生を支援しています。(三田・日吉)

■ 教職課程センター

教職課程の運営のほか、教員養成に関する調査・研究を推進しています。学生は教職課程センターに登録(例年300名から400名が新規登録)し、所定の科目を履修することで中学校および高等学校の教員普通免許状に必要な単位を修得できます。(三田)

■ 教養研究センター

多分野にわたる教養教育に関する研究活動を推進することを目的に設置されました。大学教育カリキュラムの研究、身体と言語のあり方をめぐって新しい「知」を探り、言語力育成を目指す研究や実験授業、学問的・知的活動のためのスキル・考え方を身につけるアカデミック・スキルズを学部横断的に提供しています。(日吉)

■ 国際センター

国際交流活動の拠点として世界各地の協定大学と研究者や学生の交流を推進しています。義塾で学ぶ留学生や留学を希望する学生をサポートし、短期海外研修プログラムも運営しています。また、「国際センター講座」として英語による科目を年間約80科目設置しています。(三田)

■ GICセンター

GICセンター(Center for Global Interdisciplinary Courses)は国際的かつ学際的な人材の育成を主たる目的として設立されました。GIC科目では、講義、質疑応答、ディスカッション、レポート、試験等の一切が英語(またはその他の外国語)で行われます。約80科目のGICセンター独自科目と約400科目のGIC認定科目は4つのキャンパスに広がり、全ての学部生が履修することができます。GIC科目を40単位以上取得した学生にはGIC Program修了証が授与されます。(日吉)

しどう ■ 斯道文庫

麻生太賀吉氏寄贈の図書を基に、和書・漢籍と基本研究書など約17万冊を所蔵し、国内外の和漢書の現地調査、マイクロフィルムやデジタル撮影による副本作成、本の比較校勘などを行っている東洋古典文学(書誌学)の研究所です。(三田)

■ 福澤研究センター

福澤諭吉と慶應義塾を視野に置き、近代日本研究に資することを目的に設立されました。福澤および義塾の歴史に関する資料の収集・整理・保存や、福澤門下生などの義塾出身者についての調査研究のほか、大学設置講座、講演会なども行っています。(三田)

■ 東アジア研究所

慶應義塾の東アジア研究を国内的・国際的ネットワークを通して発展させるため、学際的共同研究を推進しています。そのために、内外の研究機関や研究者との学術交流を図り、歴史研究と現状分析、および基礎研究と応用研究を重層的に展開しています。研究所内に、現代中国研究センター、現代韓国研究センターが設置されています。(三田)

■ 日本語・日本文化教育センター

留学生に対する日本語・日本文化に関する教育の発展を目的として設置しています。別科・日本語研修課程、学部の第二外国語としての日本語の授業を運営し、文学研究科・国文学専攻日本語教育学分野にも協力しています。別科・日本語研修課程では約180名の留学生が学んでいます。(三田)

■ メディア・コミュニケーション研究所

メディア・コミュニケーションの研究と教育を目的としています。研究生には、基礎科目やマス・メディアの制度、法律、政策、歴史などに関する科目、実務家による新聞・放送・広告の授業などを開講しています。研究生は「研究会」が必修です。(三田)

■ 体育研究所

健康・運動・スポーツに関する研究と教育を目的とした組織です。塾生・教職員を対象とした各種大会や講演会など、スポーツの振興を目的とする活動も行っています。体育科目の授業のほか、地域住民への感動教育・体験教育の一助も担っています。(日吉)

■ 自然科学研究教育センター

自然科学の研究と教育を促進し、さらなる質の向上を意識しながら、世界文明に貢献することを目的としています。学部、キャンパス、研究領域を超えるだけでなく、一貫教育校とも連携しながら、自然科学における研究と教育活動を行っています。(日吉)

Correspondence Courses

〔通信教育課程〕



慶應義塾大学の通信教育課程には戦後間もない1948年の開講以来、70年の歴史があり、さまざまな事情で通学課程に通えなかった人、自分の向学心をさらに満たしたい人、自らの学歴を高度化することで職業的なステップアップを目指している人を中心に現在、全国で8,000人以上の幅広い

年齢や職業の学生が学んでいます。文学部、経済学部、法学部の3学部があり、教授陣は通学課程と同じ教員で構成され、学生は所定の単位を修得すれば慶應義塾大学の卒業生として、通学課程と同じ学士の学位を取得できます。学びやすい学費設定も魅力の一つです。

【入学資格】

大学を卒業することを目的とした正科生には、学歴により、主に高等学校卒業生および卒業見込みの人を対象とした普通課程、短期大学・高等専門学校卒業生および卒業見込みの人を対象とした特別課程、大学卒業生および卒業見込みの人を対象とした学士入学の三種類があります。普通課程では卒業のために4年間、特別課程では3年間、学士入学では2年半は在籍する必要があり、どの課程も入学時から最長12年間在籍できます。

【学習システム】

通信教育課程では、テキストによる通信授業、スクーリングによる面接授業を中心に、放送授業、インターネットによるメディア授業（E-スクーリング）などさまざまな授業形態を組み合わせて、自分のペースで学習に取り組めます。通信授業は配本によるテキストの学習が終わり、レポートを提出すると、その科目について科目試験を受験することができます。試験は原則として年4回（1回に東京を含む14都市程度で実施）、大学から派遣される教職員のもとで行われます。スクーリング（夏期スクーリング・夜間スクーリング・週末スクーリングなどがあります）は、一定期間通学して教室等で直接授業を受け、試験を受けるものです。卒業には所定の単位を修得した上で、本学専任教員の指導を受けながら卒業論文を作成し、卒業試験に合格することが必要です。

【文学部の通信教育課程】

— とらわれのない眼で人間を探求する —

慶應義塾大学の文学部は、単に文学系統だけでなく、人文科学のすべての領域を広くカバーしています。そこでは人間社会の機構や機能を含め、人間そのものの探求を究極の目標として、さまざまな研究と教育がおこなわれています。通信教育課程でも、哲学、倫理学、美学美術史学、社会学、心理学、教育学、人間科学の各専攻を中心として、広義の哲学に関する研究をおこなう第1類（哲学、美学、人間関係学、図書館・情報学の学士号が取得可能）、日本史学、東洋史学、西洋史学、民族学考古学の各専攻を中心として、歴史に関する研究をおこなう第2類（史学の学士号が取得可能）、国文学、中国文学、英米文学、独文学、仏文学の各専攻を中心として、文学と言語に関する研究をおこなう第3類（文学の学士号が取得可能）に分かれ、現在3,500人以上が学んでいます。自分の所属だけでなく、他の類の科目も幅広く履修することが求められます。また、教職課程の必要な単位を合わせて修得すれば、中学校教諭1種（国語科、社会科、英語科）や、高等学校教諭1種（国語科、地理歴史科・公民科、英語科）の教員免許状を取得することも可能です。

【慶友会】

全国各地に存在する通信教育課程の在学生在が自主的に結成している慶友会は現在50団体以上に及び、定期的に例会を開いて勉学上の情報を交換したり、講演会、研究会をおこなったりしています。各慶友会の活動地域に慶應義塾の教員を招き、セミナーや講演会を開くことができる講師派遣制度もあります。こうして先生方と親睦を深め、楽しい学習の機会を持つことができるのも通信教育課程の特色です。

さらなる詳細は、通信教育課程のホームページをご覧ください。

<https://www.tsushin.keio.ac.jp>

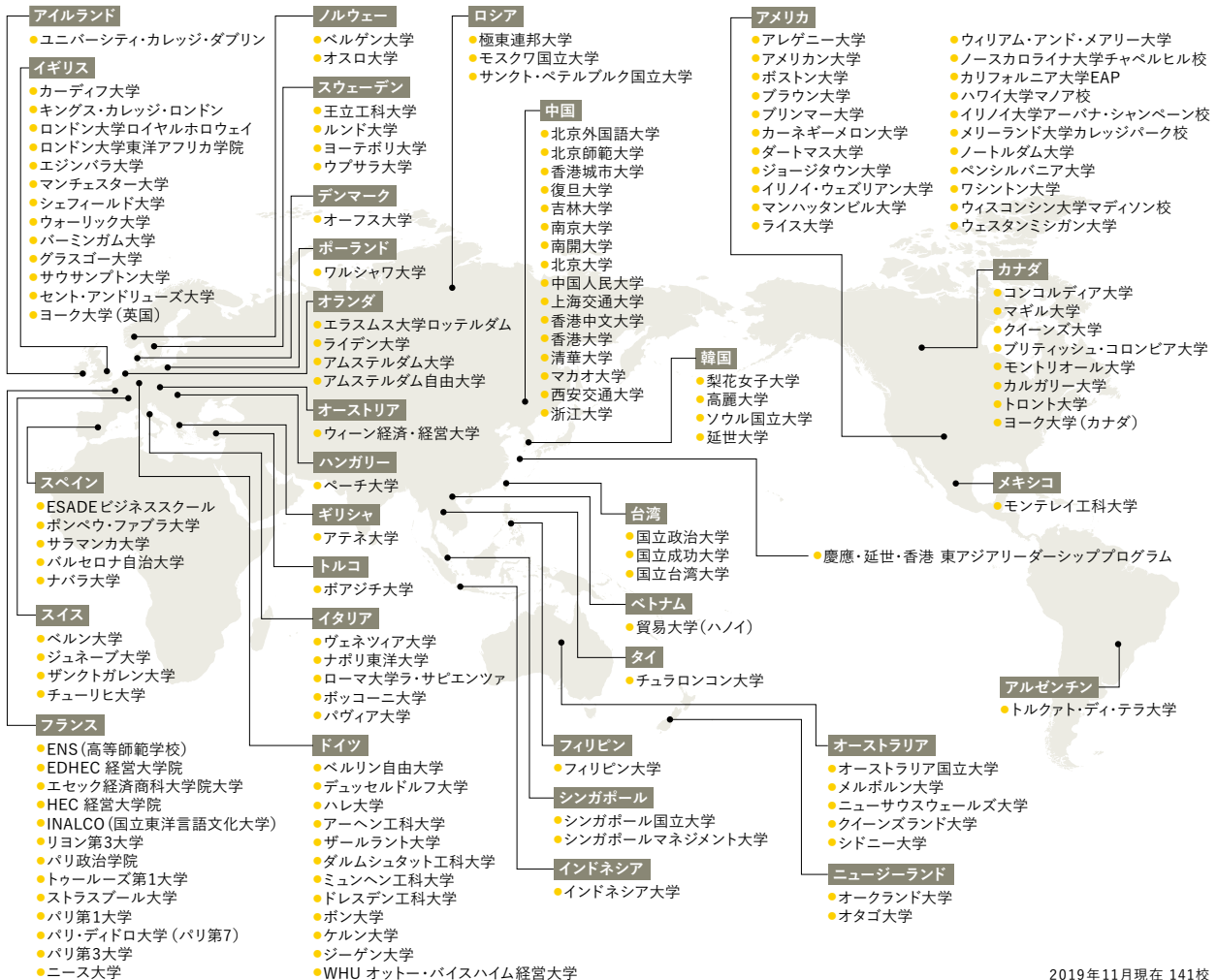


留学 の すゝめ

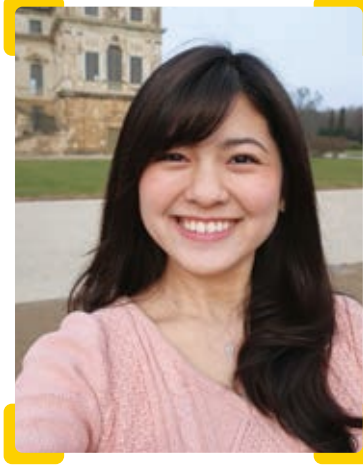
慶應義塾の創設者・福澤諭吉は幕末期にアメリカとヨーロッパの両方を時間をかけて視察することができた、当時としては稀な知識人でした。その伝統を継ぐ慶應義塾大学は、学問と見聞を広く世界に求めることを極めて重視しています。

本学は現在、世界の300以上の大学・高等教育機関等と協定を締結し、学生交換、学術交流、研究連携を展開しています。協定校との間には一年間の派遣交換留学制度や夏季・春季休校を利用した短期海外研修プログラムなどがあります(詳細は国際センターのウェブページをご覧ください。http://www.ic.keio.ac.jp)。交換留学生として留学すれば、授業料は本学に納入するだけで済みます。ここでは、ドイツに一年間の交換留学をした田代りささん(2018年独文学専攻卒業)の体験記を紹介しましょう。

(派遣交換留学(全塾)協定校一覧)



Study Abroad



Risa Tashiro

私が留学を志したのは2年生のはじめ頃でした。1年生の春休みに、ボン大学の語学研修に一月間参加し、そこでドイツの大学や生活スタイルに魅せられたのが直接的なきっかけです。しかし、留学先の大学選びに際し、当時の私は明確な研究内容がまだ決まっておらず、何を学びたいからどの大学がいいといった考え方で留学先を選ぶことはできませんでした。従って、立地や大学規模を比較したり、ドイツの友人に相談しながら自分が一番ワクワクする大学を選びました。

志望大学を選んだ後は、学内選考のための対策に入ります。幸いにも、私の第一志望だったザールラント大学は入学条件に語学力の公的証明が必要なかったため、エントリーのための特別な準備はせず、自分のペースで勉強を進めました。大学の授業に加え、リスニング力を強化するためにドイツ語のYoutubeチャンネルを毎日見て、シャドーイングやディクテーションを何度も行いました。そして書類選考・面接を終え、2年生の秋学期末に派遣交換留学生として認められました。学内選考の通過後は半年かけて実質的な準備に入ります。私の場合は留学後すぐに卒業できるように、周りの友人よりも多くの授業を取り、また留学資金を貯めるために今まで以上にアルバイトも頑張りました。その一学期間は本当にあっという間で、気づけば留学開始の9月になっていました。

留学生活は毎日が充実しており、今思い返せば長いようで短い1年間でした。到着してすぐの頃は自分の言いたいことが上手く言語化できず、悔しい思いをした記憶が残っています。文化の違いにイライラしたり、傷つくこともありました。しかし、徐々に友達ができ、日々の生活は楽しいものへと変わっていきました。

友達とピクニックやショッピングに出かけたり、深夜まで語り明かしたのは良い思い出です。大学の授業も最初は難しくてさっぱり理解できませんでしたが、回を重ねる毎に内容が頭に入ってくるようになりました。参加していたゼミの教授にプレゼンテーションの出来を褒められた時はとても嬉しかったです。留学前はA2レベルだったドイツ語能力はC1まで伸ばすことができ、遊ぶだけではない実りある留学生活を送ることができたと実感しています。

帰国後は遡及進級したため既に4年生の秋学期に入ってしまう、就職活動と卒業論文を同時並行せざるをえませんでした。就職に関しては、日本とドイツのどちらで働くか迷いましたが、最終的に内定を受諾したのはドイツの会社でした。今はドレスデンにある小さな会社で、唯一のアジア人として働いています。日本での就業経験がないため比較できませんが、リラックスした環境で仕事に取り組める点が気に入ってます。留学後の進路は一人一人異なりますが、留学は全ての人にとって人生経験を積むことができる貴重なチャンスであるのは間違いありません。私は、留学を通して柔軟な考え方と自分を貫く意志の強さを手に入れました。



奨学金

奨学金制度とは、能力のある学生に対して一層の成長を促すこと、もしくは金銭的・経済的理由により修学困難とされる学生に対して修学を支援することを目的として金銭の給付・貸与を行う制度のことです。

慶應義塾大学で扱う奨学金は、「慶應義塾大学独自の奨学金」、国の育英事業である「日本学生支援機構奨学金」、そして「民間団体・地方公共団体の奨学金」、そして国による「高等教育の修学支援新制度」の4つに大きく分かれます。奨学金によっては併願・併用することも可能です。

まず、慶應義塾大学独自の学内奨学金は、すべて返済不要の給付型奨学金で、今後も拡充していく予定です。その多くが経済支援を目的としています。成績優秀者を対象とした奨学金、家計状況が急変した際の支援、地方出身者や海外でのグローバルな学習活動への支援など、学生のニーズに対応するさまざまな奨学金を用意しています。塾員(卒業生)で結成される様々な三田会(同窓会)や篤志家など、慶應義塾大学を支援して下さる多くの方々からいただいた寄付金で運営している奨学金が多く、「社中協力」を実感できるのも特徴です。ほとんどの奨学金の給付期間は1年間ですが、原則再申請できます。1年間単位で申請できるため、それだけ多くの学生にチャンスがあります。入学後の申請が中心ですが、一般入試前に申請できる地方出身者向けの

奨学金として、1都3県(東京都・神奈川県・埼玉県・千葉県)以外の日本国内の高等学校出身者を対象にした返済不要の給付型奨学金「学問のすゝめ奨学金」があります。

民間団体・地方公共団体の奨学金は、多くの場合、一度採用されると卒業時まで継続的に給付または貸与されます。

国が扱う日本学生支援機構の奨学金には、主に高校予約採用と入学後に申請する定期採用があり、従来は返還義務を負う貸与型(無利子の第一種と有利子の第二種)だけでしたが、返還不要な給付型が新設されました(高校予約採用のみ)。2020年4月より授業料減免と返還不要な給付型奨学金による「高等教育の修学支援新制度」が始まりました(高校予約採用と入学後に申請する在学採用)。

これらの奨学金は、いずれも家庭の経済状況や学力・人物によって選考されますが、それぞれ趣旨・金額・受給期間・返済義務の有無などが異なります。各々の特性を認識し、自分にあった奨学金を選びましょう。詳細については、奨学金webサイト(<https://www.students.keio.ac.jp/com/scholarships/apply/form.html>)をご覧ください。学生部福利厚生支援担当(03-5427-1570)へお問い合わせください。

文学部学生が出願できる奨学金の概要 (すべて2019年度実績)

【学内奨学金】(給付型)(2019年度実績)

慶應義塾大学給費奨学金	経済的に修学困難であると認められ、成績・人物ともに優秀な者。	50万円 / 年額
慶應義塾大学修学支援奨学金	急激な家計状況の変化、経済的な困窮のため、経済的に修学が困難な者。	学費の範囲内の金額 (平均は年額約30万円)
慶應義塾大学創立150年記念奨学金 (海外学習支援)	勉学の意欲を持ちながらも、経済的理由によりグローバルな学習活動に参加することが困難な者。	10、20、30万円 / 年額 ※参加プログラム・渡航先の国や地域による
慶應義塾維持会奨学金	人物・学業成績ともに優秀で、かつ経済的に学業に専念することが困難な者。出身高校の所在地が東京都・神奈川県・埼玉県・千葉県以外の道府県の者を優先。	50万円 / 年額
指定寄付奨学金	奨学金によって異なる。育英型、経済支援型、家計急変者支援型があり、約30種ある。	10～60万円程度 / 年額 ※奨学金によって異なる

学内の奨学金に関する情報の一部は塾生サイトでも閲覧できます。

【学問のすゝめ奨学金】 一般選抜出願時(入学前)に出願可能な奨学金です

募集対象	奨学金額	受給期間
<ul style="list-style-type: none"> ■ 慶應義塾大学の学部第1学年に入学を強く希望する東京都・神奈川県・千葉県・埼玉県以外の高等学校出身者 ■ 人物及び学業成績が優秀であるにもかかわらず、経済的理由により本学への入学に困難を来している者 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 初年度年額60万円 ■ 初年度は上記金額に入学金相当額を加算(20万円) ■ 入学2年目以降は成績優秀者の奨学金額を増額(年額80万円) ■ 奨学金の返済は不要 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 最長4年間 ■ 毎年の審査・継続により継続受給が可能

※採用された学生が国による「高等教育の修学支援新制度」の対象となる場合は、奨学金額が減額となることがあります。

7月中旬に以下のwebサイトで募集要項が公開されます。

<https://www.students.keio.ac.jp/other/prospective-students/scholarship-gakumon.html>

学問のすゝめ奨学金



【民間団体・地方公共団体奨学金】 給付型と貸与型を合わせて、約140種あります。(2019年度実績)

民間団体、地方公共団体の奨学金に関する情報の一部は塾生サイトでも閲覧できます。

【国による「高等教育の修学支援新制度」】 授業料減免と給付型奨学金による支援が受けられます。(2020年度より)

支援対象要件や支援内容は右記のwebサイトで確認できます。日本学生支援機構 <https://www.jasso.go.jp/shogakukin/kyufu/>

学生生活と奨学金

わが国では「大学で学ぶ若者たちのための奨学金が不足している」と言われて久しいのが実情ですが、それでも少しずつ慶應義塾内外の奨学金は増えてきています。奨学金を受けて、家計を助けながら活き活きと勉学を続けている在学生たちの声を聞いてみましょう。奨学金には様々な種類があり、応募や受給の仕方もいろいろですが、これから慶應義塾大学で学ぶ方々には、彼らの話も参考にして、自分に向けた奨学金を見つけていただきたいと思います。



■ 住谷 広大 君
東洋史学専攻3年（インタビュー時）

—— 慶應義塾大学に入ろうと思ったきっかけは？

住谷 僕は日吉キャンパスからも近い神奈川県立川和高校の出身なんですけれど、わりと早い時期から慶應義塾大学の文学部を受験することは決めていました。自宅から近いこともありますし、有り体に言って、偏差値の高い大学に行こうという気持ちもあって。歴史が好きだったので、文学部というのも、自然と決まりました。慶應にはなんとなく「カッコいい」というイメージを持っていましたし。

—— 奨学金は、いつ申し込んだのですか？

住谷 奨学金のことは、受験生の頃は全然考えていませんでした。入学した時には奨学金ガイダンスもあるにはあって、親には行けと言われていたんですけど、なんとなく行かずじまいになってしまって…。たまたま、同じ慶應に通っている友人が、奨学金を受けるための作文を書いているのを見て、「へえ、そういうのがあるんだ。僕も出してみようかな」と思ったのがきっかけでした。それで、学生部で奨学金の情報が載っている冊子をもって、家は母子家庭で裕福ではありませんでしたから、最初は経済状態を審査される給費奨学金を選んで応募しました。書類を作るのは、「これは、意外と大変だぞ」と思いました。将来の進路希望とか意外と詳しく書く欄があって…。経済状態が苦しい、ということなどは切々と(笑)…、「大学院まで行って勉強したいので経済的に難しい」、ということを書きました。その次の年は、別の奨学金に応募して、これもいただくことができました。これは、成績が審査された上でいただける奨学金でしたので、「勉強頑張りました!」ということを書きましたね。いただいた奨学金は、ほぼ学費に当てました。そうすることで、親が「バイトして、お金を家に入れる」と言わなくなったので、助かりました。勉強してお金がいただけるというのは、本当にありがたいことだと思います。

—— 奨学金を受けるような成績を収めるためには、何か心がけることあるでしょうか？

住谷 規則正しい生活を送るということですかね。早く寝て、早く起きて、授業で寝ないということじゃないでしょうか。そして、授業をさぼらない、ということですね。これが、意外と難しいですよ、大学生ですと。そのためには、早く寝ることです、もう10時くらいにはスパッと寝ると(笑)。僕は、わりと勉強なんかも短時間で集中してやる方が好きな方かな、と思います。

—— アルバイトやサークル活動などもしていますか？

住谷 以前は、自宅の近所のショッピングモールで清掃のアルバイトをしていたんですけど、リストラされちゃったので、最近は塾の採点のアルバイトを短期でやっています。サークルは特にやっていません。

—— 余暇はどんなふうに過ごしていますか？

住谷 去年は結構忙しくて、家に帰って来たら寝て、起きたら大学に行って、という感じだったんですけど、今年はまあまあ時間があって、そういう時は…、漢文読んでますかね。やっぱり、大きな辞書が必要なので、図書館で漢文を読んでいます。諸橋漢和辞典みたいな大きな辞書は、自分で買うと高いですからね。高校時代から漢文が好きだったというわけでもありません。慶應の入試は、漢文はないですから。でも大学に入ってから、興味が湧いて来ました。

—— 漢文が好きになったきっかけがあったんですか？

住谷 一年生の時に『莊子』を読んだら面白くて、「東洋史もいいな」と思いました。第二外国語は中国語を取っていましたが、中国語も面白かったです。日本語と共通の部分も多いので、分かりやすいし、思ったよりは早く上達できた気がします。今は、桐本東太先生のゼミにも所属しているんですけど、楽しいですね。やっぱり、好きなことを勉強できていますからね。『世説新語』という南朝宋の時代の面白い本があって、その訳本を、僕が2年生の時の5月くらいにたまたま読みまして、「この時代のことを勉強しようかな」と思うようになりました。教職課程も履修していて、将来は教員か研究職を目指したいと思っています。

—— 専門以外で、面白いと思った授業はありましたか？

住谷 教職課程では、体育も履修しなくちゃいけないんですけど、その時に習った気功も面白かったですね。「体育」と言いながら、授業の半分くらいは横になっていたんですけど。先生は中国から帰化された方で、朝の一時限から気功というのは、気持ち良かったです(笑)。



Event

〔講義入門2020〕(日吉キャンパス)

今、世界は大きな変化の時代を迎えています。このような時代には、従来のものの見方や考え方が通用しにくくなります。そこで重要となるのが、自分の頭で考えること、すなわち学問することです。

学問というと難しく聞こえるかもしれませんが、どんな学問も、身近で小さな問題に興味を持ち、「？」を抱くことからスタートしています。このような営みを続けることが、徐々に大きな成果となって結実し、社会の問題を解決する力となっていきます。

今年度の慶應義塾大学の入学広報イベントでは、さまざまな学問の魅力に触れてもらうため、文学部をはじめ全学部の教員が高校生や受験生の皆さん向けに模擬講義を行います。「講義入門2020」は慶應義塾大学における学問の多様性、さらに文学部における研究内容の幅広さと奥深さを体験する絶好の機会といえるでしょう。

「課題が与えられ、正解を教わる」という高校までの授業とは異なり、「課題を自ら見つけ、解決策を生み出す」という大学での学び、学問を体験してみませんか。皆さんの参加を、心より歓迎します。

■ 開催日時：2020年6月7日(日)

■ 開催場所：慶應義塾大学 日吉キャンパス

■ 対象学部：文学部をはじめとする慶應義塾大学全学部

〔講義入門2020〕は事前申込制です。

申し込みの方法や講義内容については、
慶應義塾大学入学案内ページ

<https://www.keio.ac.jp/ja/admissions/>

および文学部のホームページ

<https://www.flet.keio.ac.jp/>

で随時更新します。



※写真はイメージです。

Extension Program

〔公開講座〕 極東証券株式会社寄附講座



めぐりあう文学部



慶應義塾大学文学部は、2010～13年度に公開講座「文学部は考える」を開講し、続いて「行動する文学部」(2015年度、文学部創設125年)、「文学部を体感する」(2016年度)、「橋渡しする文学部」(2018年度)、「文学部のひらく世界」(2019年度)を開講してきました。そして今年は「めぐりあう文学部」と題し、分野や時空を超えためぐりあいをご披露します。ぜひ三田キャンパスにお越し下さい。

2020年6月20日(土) 14:30-16:30(開場 14:00) 北館ホール(1階)

「哲学と生命科学のめぐりあい」

斎藤慶典(哲学) × 佐藤直樹(東京大学名誉教授・生命科学) 司会: 田中泉吏(哲学)

2020年7月4日(土) 14:30-16:30(開場 14:00) 北館ホール(1階)

「古典をとおしためぐりあい」

石川 透(国文学) × ピーター・マクミラン(杏林大学客員教授・英文学) 司会: 井上 櫻子(仏文学)

2020年10月17日(土) 14:30-16:30(開場 14:00) 北館ホール(1階)

「ナチズムを考える」

清水明子(西洋史学) × 辻 英史(法政大学人間環境学部・ドイツ近現代史) 司会: 長谷川敬(西洋史学)

※開催日程と講座の内容については、変更させていただく場合もあります。

〔対象〕 高校生・塾生・一般

〔場所〕 慶應義塾大学 三田キャンパス

〔受講料・入場料〕 無料(事前予約不要)

Facebook : @kbunkouza / Twitter : @k_bun_kouza

詳細・最新情報は文学部ホームページに随時アップします。

<https://www.flet.keio.ac.jp/>

〔お問い合わせ〕

慶應義塾大学 三田キャンパス 学生部内公開講座事務局

〒108-8345 東京都港区三田2-15-45

E-mail : bun-sec@adst.keio.ac.jp

Alumni



各界で活躍する 文学部OB & OG

慶應義塾大学文学部は、この冊子全体にも示されている通り、いわゆる狭い意味での「文学(詩、小説、戯曲など)」を研究するだけの学部ではありません。はるかに広大な知的領域を視野に入れた総合的な人間知を志向する場です。もちろん、詩、小説など「言語芸術」の研究は重要な一側面ですが、それも作品を吟味するだけの意味で行われるものではありません。“ことば”と“芸術”を見つめることが人間存在の本質に迫る大いなる手がかりなのです。その意味で、国文、英米文、仏文などのいわゆる文学研究の専攻と、心理や社会、人間科学などの社会科学系の専攻とは、根本的に異なる学問をしているわけではありません。言語はたとえば歴史と、社会はメディアと、人間心理は地域研究と、というように、各専攻が研究対象とするものは必ず別の分野と結びついています。文学部における学問は、互いに関係し合い、包摂しあう、いわば曼荼羅のような構造をなしているのです。

そんな文学部は、多種多様な才能をもった逸材を各界に輩出しています。まず、「文学部」といえば一般にイメージされる“ことば”が大きな役割を演じるジャンル、すなわち、出版、放送、ジャーナリズム、文壇において、文学部の卒業生たちは大きな勢力をなしています。また、舞台芸術においても、歌舞伎や能などの古典から現代舞台芸術にいたるまで、文学部OB・OGのプレゼンスはさきわめて大きいものがあります。さらには、日本を代表する美術館、博物館の指導的職にある卒業生、またテレビや映画のドラマ・プロデューサーとして活躍している卒業生も相当数にのぼります。

一方、文学部のOB・OGは、実業界においても重要な役割を果たしています。慶應義塾においては、文学部での学問もまたある意味での“実学”であり、芸術・思想の世界と現実社会との間にきわめてアクチュアルな問題意識と鋭い視線を掲げ続けているのです。文学部OB・OGの実業人は、文明論的な視野と構想力を持っており、所属する企業をユニークな理念のもとにリードしています。同様のことは、政界、官界、また国際機関で活躍している卒業生たちについても言うことができます。

このように、文学部の歴代の卒業生たちは、多様な世界の中で、ユニークで鮮やかな光彩を放ち続けているのです。

文学部OB & OG

〔TV・映画〕

森本 毅郎	キャスター	昭38
杉田 成道	演出家、映画監督	昭42
鈴木 敏夫	スタジオジブリ代表取締役プロデューサー	昭47
大平 太	日本テレビ・プロデューサー	平02
久保 純子	アナウンサー	平06
魚住 りえ	アナウンサー	平07
萩野志保子	アナウンサー	平08
水ト 麻美	アナウンサー	平22

〔雑誌・新聞〕

山口 昌子	フリージャーナリスト	昭38
青木 理	フリージャーナリスト	平02

〔企業〕

遠藤龍之介	フジテレビジョン代表取締役社長	昭56
青井 浩	丸井グループ代表	昭58
吉田智誉樹	四季株式会社(劇団四季)代表取締役社長	昭62

〔政治〕

石原 伸晃	衆議院議員	昭56
古川 俊治	参議院議員	平05

〔国際機関・NPO関連〕

星野 昌子	日本国際ボランティアセンター特別顧問	昭29
伊勢 桃代	元国連大学事務局長	昭34
森嶋 伸夫	NPO法人・新塾代表理事・事務局長	昭63

〔文筆〕

坂上 弘	作家	昭35
松岡 享子	作家、児童文学翻訳家	昭35
林 えり子	作家	昭37
村松 友視	作家	昭38
吉増 剛造	詩人	昭38
堀口すみれ子	詩人	昭42
川又 千秋	作家	昭47
林 望	作家、日本文学者	昭47
阿川佐和子	エッセイスト	昭51
三田 完	作家	昭53
水野 衛子	中国語字幕翻訳家	昭56
寺沢 大介	漫画家	昭57
玄侑 宗久	作家、芥川賞受賞	昭57
鈴木 光司	作家	昭58
池井戸 潤	作家、直木賞受賞	昭61
朱川 湊人	作家、直木賞受賞	昭61
永田 俊也	作家	昭62
宮崎 哲弥	評論家	平01
若松 英輔	批評家	平04
朝比奈あすか	作家	平11
田中 和生	文芸評論家	平13
朝吹真理子	作家、芥川賞受賞	平19

〔スポーツ〕

杉山 茂	スポーツ・プロデューサー	昭34
江藤 省三	慶應義塾体育会野球部元監督	昭41
堤 辰佳	元読売巨人軍GM、ジャーナリスト	平01
三宅 諒	フェンシング選手、ロンドン五輪銀メダリスト	平25

〔舞台・音楽・美術など〕

笈田 ヨシ	演出家・俳優	昭32
西田 宏子	根津美術館顧問	昭36
二代目 市川 猿翁	歌舞伎俳優	昭37
酒井 忠康	世田谷美術館館長	昭39
川久保 玲	ファッションデザイナー	昭39
養 豊	兵庫県立美術館館長	昭40
原 由美子	スタイリスト	昭40
篠崎 光正	演出家	昭47
松任谷正隆	音楽プロデューサー、作曲家	昭49
松原 英俊	鷹匠	昭49
鶴山 仁	演出家	昭50
小池修一郎	宝塚歌劇団演出家	昭52
南條 史生	森美術館館長	昭52
竹内まりや	シンガーソングライター	
五代目 中村 時蔵	歌舞伎俳優	
坂手 洋二	劇作家、「燐光群」主宰	昭59
紺野美沙子	女優	昭59
小山 久美	スターダンサーズ・バレエ団代表	昭60
千住真理子	バイオリニスト	昭60
藤岡 幸夫	指揮者	昭60
今井 朋彦	文学座俳優	平02
越智 隆治	アンダーウォーター・フォトグラファー	平02
四代目 市川 猿之助	歌舞伎俳優	平10
柴本 幸	女優	平18
中川龍太郎	映画監督、脚本家	平25
森 星	ファッションモデル	平28

※現在ご活躍されているOB・OGの方々のうち、ごく一部を掲載しております。



■ 文学部入学試験データ

志願者数・入学許可者数

	2019年度	2018年度	2017年度
志願者数	4,720	4,820	5,049
現役	2,664 (56.4%)	2,851 (59.1%)	3,234 (64.1%)
男子 / 女子	男子 2,512 / 女子 2,208	男子 2,477 / 女子 2,343	男子 2,405 / 女子 2,644
入学許可者	1,033	1,023	1,116
現役	648 (62.7%)	629 (61.5%)	800 (71.7%)
男子 / 女子	男子 495 / 女子 538	男子 492 / 女子 531	男子 451 / 女子 665

	2019年度		2018年度		2017年度	
	志願者数	合格者数	志願者数	合格者数	志願者数	合格者数
帰国生	39	14	42	17	53	22
留学生	209	47	153	50	152	45
塾内進学	59		55		62	
自主応募制推薦入試	338	124	300	123	322	118

試験科目

- 外国語 (英語・独語・仏語・中国語のうち1語種を選択)
- 地理歴史 (日本史・世界史のうち1科目を選択)
- 小論文

日本史・世界史選択者数

	2019年度	2018年度	2017年度
日本史	2,240	2,343	2,483
世界史	2,480	2,477	2,566

※外国語科目は約99%が英語で受験。 ※入試の年度は入学時の年度で表示されます。

■ 文学部卒業生上位就職先企業

2018年度	2017年度	2016年度
三菱UFJ銀行 13 (13)	みずほ銀行 11 (9)	三菱東京UFJ銀行 17 (16)
東京海上日動火災保険 10 (8)	三菱東京UFJ銀行 9 (8)	東京海上日動火災保険 14 (14)
みずほ銀行 9 (5)	全日本空輸 9 (9)	東京都 11 (8)
慶應義塾 7 (6)	三井住友海上火災保険 8 (6)	三井住友銀行 10 (8)
三井住友海上火災保険 7 (6)	損害保険ジャパン日本興亜 8 (5)	みずほフィナンシャルグループ 10 (8)
富士通 7 (4)	日本放送協会 8 (4)	三井住友海上火災保険 9 (7)
SMBC日興証券 6 (4)	楽天 7 (3)	日本電気 8 (7)
楽天 6 (5)	慶應義塾 7 (6)	三井物産 7 (6)
三井住友銀行 6 (5)	東京都 7 (6)	損害保険ジャパン日本興亜 7 (7)
三井住友信託銀行 6 (4)	明治安田生命保険相互会社 7 (6)	リクルートキャリア 6 (5)
全日本空輸 6 (6)	キーエンス 6 (4)	三井住友信託銀行 6 (6)
第一生命保険 6 (6)	伊藤忠商事 6 (2)	三菱UFJ信託銀行 6 (5)
東京都 6 (5)	三井住友信託銀行 6 (5)	ゆうちょ銀行 6 (6)
東日本電信電話 6 (3)	大和証券 6 (6)	第一生命保険 5 (4)
日本放送協会 6 (4)	アクセンチュア 5 (3)	全日本空輸 5 (5)
KDDI 5 (5)	三菱電機 5 (3)	三越伊勢丹 5 (4)
エヌ・ティ・ティ・データ 5 (5)	日本生命保険相互会社 5 (4)	りそなグループ 5 (5)
エヌ・ティ・ティ・コミュニケーションズ 4 (4)	コーセー 4 (4)	大和証券 4 (2)
サントリーホールディングス 4 (3)	りそなホールディングス 4 (4)	明治安田生命保険 4 (2)
ソフトバンク 4 (3)	三井住友銀行 4 (4)	日本航空 4 (4)
りそなホールディングス 4 (3)	三井物産 4 (3)	慶應義塾 4 (3)
学校法人神戸学園 4 (2)	三菱商事 4 (3)	横浜銀行 4 (2)
三井不動産リアルティ 4 (4)	第一生命保険 4 (4)	日本銀行 4 (4)
日本航空 4 (4)	東京海上日動火災保険 4 (3)	
日本生命保険相互会社 4 (4)	東日本電信電話 4 (3)	
博報堂 4 (3)	日本郵便 4 (2)	
	日立製作所 4 (4)	
	博報堂 4 (3)	

※人数は原則として本人の届け出に基づく。(当該年度の翌年4月30日現在) ※()内は女子で内数。

Frequently Asked Questions

入試、学生生活、進路など、受験生の皆さんからよくいただく質問をまとめました。

Q 文学部に入学するにはどのような方法がありますか？

A 一般選抜のほか、文学部独自の制度として「自主応募制による推薦入学者選考」があります。慶應義塾大学文学部を第一志望とし、一定の資格を充たしていれば、だれでも自由に応募できます。また慶應義塾内の5つの高等学校からの塾内進学、外国人留学生入学試験、帰国生入学試験による入学があります。

Q 文学部には、高校のような「クラス担任」はいるのですか？

A 第1学年に関しては、希望する語種によってクラスに振り分けられ、各クラスには1名ずつ担任が付きます。第2学年以降の各専攻にはそれぞれ専攻担任が複数おり、学生生活や履修等の相談に応じます。また、文学部には日吉・三田各々に学習指導、学生部の委員がいます。

Q 第2学年で各専攻に進級した後、専攻の変更はできますか？

A 第2学年進級後の専攻変更は原則として認められていません。第1学年で行われる学部や各専攻のガイダンスに出席したうえで、慎重に選定して下さい。

Q 志望する専攻には必ず入ることができるのでしょうか？

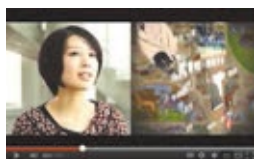
A ほとんどの専攻では、希望した学生全員を受入れています。ただし、専攻によっては、希望する学生が一定数に達した場合に参考試験などを行うことがあります。

Q 文学部で取得できる資格にはどんなものがありますか？

A 中学校・高等学校教員免許（国語、社会、地理歴史、公民、英語、中国語、独語、仏語、情報）、図書館司書、司書教諭、学芸員などがあります。

Q 文学部卒業後、文学研究科への進学を考えています。内部推薦などによる大学院進学はありますか？

A 文学研究科の場合、今のところ内部推薦はありません。一般入試および留学生入試（修士課程）による入学のみが認められています。



下記のYou Tube上に**文学部公式プロモーション・ビデオ**を公開しています。教員や学生の生の声をさくことができますので、是非一度ご覧ください。

https://www.youtube.com/watch?v=_fyk0jMjKLO

慶應義塾大学 文学部 ホームページ <https://www.flet.keio.ac.jp/>

学部入試全般に関するお問い合わせ

入学センター 03-5427-1566 〈窓口利用時間〉月～金9:00～11:30、12:30～16:30（土・日・祝日休業）

※開校記念日（4/23）・夏期休業（8/1～10）・冬期休業（12/28～1/5）・福澤先生誕生記念日（1/10）は休み。

<https://www.keio.ac.jp/ja/admissions/>

- 全10学部6キャンパスおよび入試に関する情報等を掲載した「慶應義塾大学ガイドブック」を配布しています。
- 上記URLから請求することができます。（三田・日吉キャンパスの警備室でも入手できます）

慶應義塾大学 ホームページ <https://www.keio.ac.jp/>



<https://www.flet.keio.ac.jp/>

発行：慶應義塾大学 文学部 (2020)